

11 ココア

(1) 生産

表 1 1 7 1978年度 ココアの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積 1,000ha	収量 1,000トン	単位収量 kg/ha
1	バ イ ヤ	12月	4 1 3.0	2 3 4 0	5 6 7
2	エスピリット、サント	12月	2 1.4	9 0	4 2 3
3	パ ラ ー	12月	7.9	1.9	2 3 8
4	ア マ ノ ナ ス	12月	2 0	0 4	2 0 0
	そ の 他 の 州		0 5	0 1	
全 国 計			4 4 4 8	2 4 5 4	5 5 2

出所：IBGE

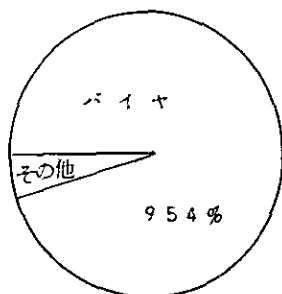
バイヤ州に代表されるココアの1978年度生産量は、24万5千トンで前年比1.72%の減収であった。バイヤ州の生産は全国生産量の95%を占め、バイヤ州の生産量の増減がそのまま全国生産に影響するが、バイヤ州では78年当初、降雨の結果PORIDÃO PARDOと呼ばれる病気が蔓延し、次に木が枯死するMORTE SUBITAが発生したことが減収の原因となっている。

栽培面積は40万ヘクタール程度であるが、目下CEPLAC（ココア栽培復興計画実行委員会）が全国的に栽培面積の拡大を図っており、アマゾン地方に新しいココア園3万4千ヘクタールの造成を始め、バイヤ州及びエスピリット、サント州のココア園7千ヘクタールの更新も行われている。またトカンチンポリス市にはアラグァイアートカンチンス・ココア地帯の生産本部が設置されてゴヤス州でのパイロット計画が進められている。

南東部ではサンパウロ州でもココア生産計画が進められており、リベイラ川流域及び海岸地方の10万ヘクタールに1千200万本を植付ける計画があり、ブラジル銀行は生産資金として3億5千万クルゼイロ、サンパウロ州立銀行が1億5千万クルゼイロの融資を決定している。

これらの新しいココア生産が収穫を開始する頃には、現在世界2位のブラジルココアの生産は第1位の生産を行なり可能性がある。

ココアの生産分布



ココアの生産推移

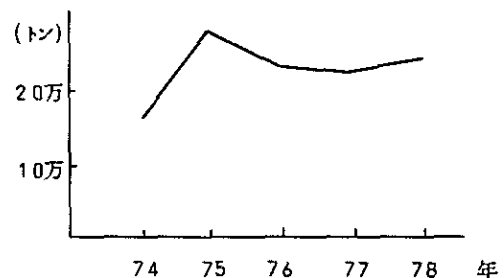


表118 ココア生産の過去5年間の推移 単位 1,000t

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
バイヤ	156	272	222	213	234
その他の州	9	10	10	10	11
計	165	282	232	223	245
面積 1,000ha	315	451	407	412	445

出所：IBGE

表119 ココア主要生産地の単位収量 単位 kg/ha

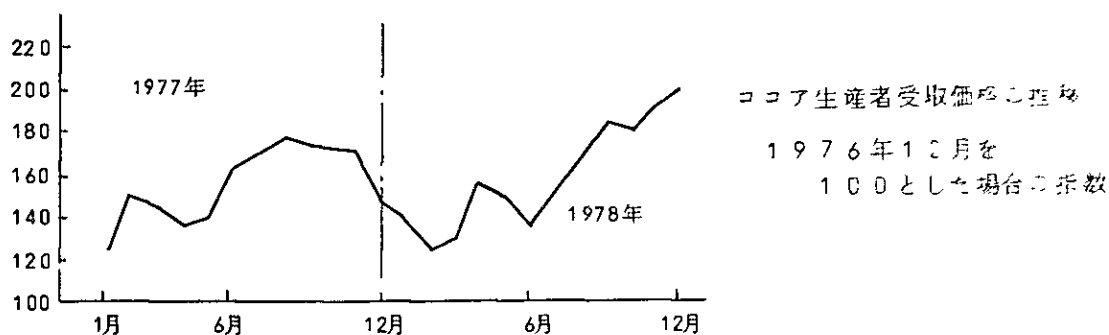
生産地	1974	1975	1976	1977	1978
バイヤ	321	648	589	557	567
エスピリット・サント	344	350	345	371	423

出所：IBGE

(2) 国内市場

ココアの生産者受取価格は1976年に前年比122.7%、77年が178.1%と急激な上昇をみたが78年度はわずかに0.3%の上昇にとどまり、年間のインフレ率を考慮すると大巾な実質価格の減少であった。年間平均価格はバイヤ州で15kg当りCR63232で前年比0.2%の増加、エスピリット・サントノ州ではCR64000で前年の91.4%に止まっている。

国内価格は毎年度の終りにかけて上昇するが78年度の販売融資が15kg当りCR1800に過ぎなかったため、価格の上昇時期まで持ちこたえられず早期に販売し、販売価格面で被害が大きかったと報じられている。



出所：CONJUNTURA ECONOMICA 2/79

(3) 国際市場

78年度の国際相場は年度当初、米ドルに対する英国ポンドの強気と、北米及び英国における加工量の減少、原料の供給運動などが予想されたため一時的に価格の下落をみたが好調とみられていたアフリカの生産が予想外に悪かったので価格は一時的に反発した。ロンドンの直物相場は77年12月がトンあたり2,418ポンドであったが、78年1月には1,840ポンドに落ちたあと4月に年度内最高の2,174ポンドを記録し、8月にはふたたび1,971ポンドへ下降した。全般的にみると77年の1～8月の平均2,888ポンドに対して78年同期の平均価格は1,971ポンドで低調であった。

ブラジルよりのココア(豆)輸出は77年に約100%の増加をみた4億ドル台が78年にも引継がれ、重量で13万4千トン、金額で4億5千300万ドルの実績を残した。この輸出高はブラジル農産物のなかでもコーヒー、大豆粕に次ぐ金額で重要輸出農産物のなかに数えられる。また、ココア、バターも8千300万ドルの輸出を記録している。輸出先国は19ヶ国に及ぶが中でも北米の輸入量をもっとも大きく、ソ連、オランダ、西独等がこれに続いている。

表120 ココア(豆)の輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
177	129	198	134	220	219	436	453

出所：CACEX

ココア(豆)の輸出は31社、ココア・バターは7社の輸出会社によって行なわれている。主要会社と1978年1～11月の実績は次の通りであった。

ココア豆の輸出会社	百万ドル
CORREIA RIBEIRO S. A	530
COOPERATIVA CENTRAL CACAU RESP. LTDA.	518
CALHEIRA ALMEIDA S. A. COM. LAVOURA IND.	390
BRANDÃO FILHOS S. A. COM. IND. LAVOURA	28.5
MATTO SOUZA S. A. IND. COM	277
ココア・バターの輸出会社	
BARRETO ARAUJO PROD. CACAU S. A	208
JOANES IND. S. A. PROD. QUIMICA VEGETAIS	16.5
CHADLER IND. BAHIA S. A.	15.3

ココア・リコールの輸出会社

BARRETO ARAUJO PROD. CACAU. S. A.	760
CHADLER IND. BAHIA S. A.	365

表121 ココア及加工品の輸出先国及金額 (1978年度)

単位 百万ドル

ココア(豆)			ココア・バター		ココア・リコール	
輸出先国	金額		輸出先国	金額	輸出先国	金額
北米	1019		北米	244	北米	660
ソ連	924		オランダ	165	ポーランド	271
西独	391		ソ連	157	ブルガリア	113
オランダ	382		西独	41	アルゼンチン	77
スペイン	357		日本	31	ポルトガル	71
その他の国	530		その他の国	32	その他の国	335
未分類	935		未分類	160	未分類	417
計	4538		計	830	計	1944

出所: CACEX RIO

12 落花生

(1) 生産

表122 1978年度 落花生の生産実績

順位	州別	収穫期	面積 1,000ha	収量 1,000トン	単位収量kg/ha
1	サンパウロ	1月、2月	1724	2274	1319
2	パラナ	2月、5月	403	504	1251
3	マット、グロソン	1月、5月	211	249	1180
4	リオ・グランデ・ド・スール	4月	83	83	1000
5	ミナス・ジェライス	6月	32	41	1281
6	バイヤ	9月	21	30	1420
	その他の州		76	71	
	全国計		2550	3252	1275

出所: IBGE

年間に乾期と雨期の2回の収穫期を持つ落花生の1978年度における生産量合計は32万5千トンで77年を僅かに0.49%上廻るものであった。これは乾期の収穫が77年の8万5千トンに対して7万1千トンと16%の減少をみたが雨期の収穫がよく77年を63%上廻る25万4千トンの増加みた結果によっている。

全国生産量の70%を占めるサンパウロ州では77年の高値に刺激されて作付面積が前年比約20%の増加がみられたうえ、年度当初の早害が雨期の収穫に影響しなかったことが少なくとも雨期の生産を伸ばした原因であった。乾期収穫分は植付直後に乾燥に合い生産数量の減収をみるとともに品質にも大きな影響をあたえた。

現在の生産量は1970年頃の92万8千トンに比較すると約3分の1の生産量で急激な減少であるが、これは小規模の農家が多く政府機関の融資を得る機会が少ないことと、発芽率の高い優良種子の入手が困難になってきたことなどが理由としてあげられており、現在の状況下では当時の生産に戻すことは困難な見通しが強い。

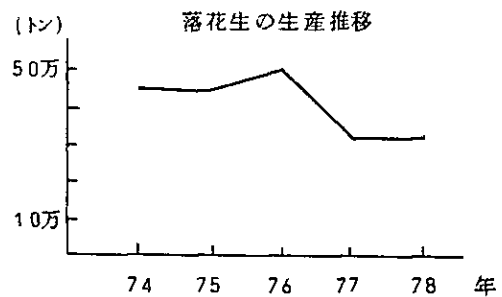
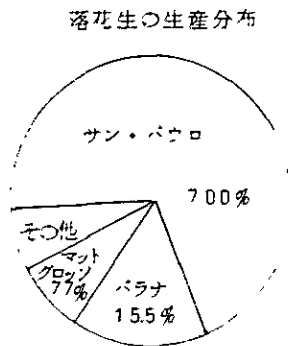


表123 落花生生産の過去5ヶ年間の推移

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サンパウロ	269	263	331	213	227
パラナ	132	110	70	43	50
マツト、グロツソ	19	39	84	42	25
その他の州	33	30	29	26	23
全国計	453	442	514	324	325
面積 1,000ha	374	345	390	229	255

出所：IBGE

表 1 2 4 落花生：主要生産地における単位収量 kg / ha

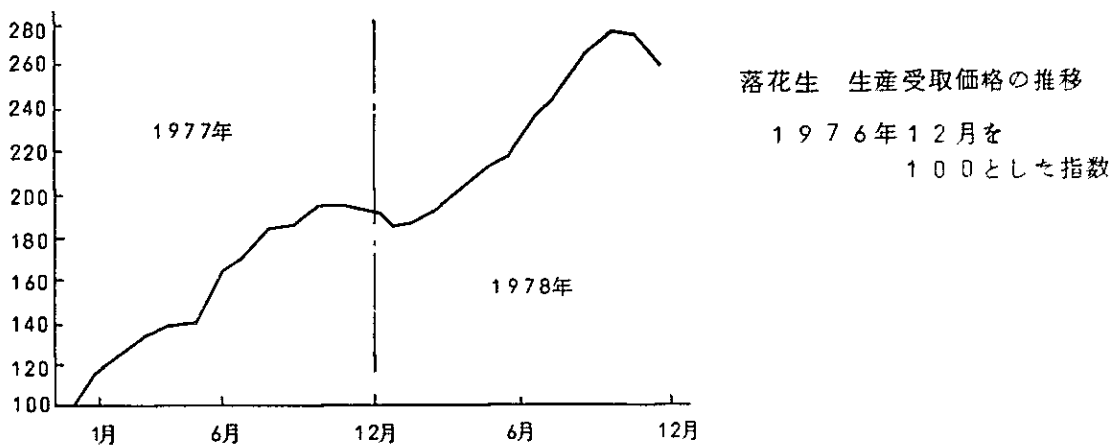
生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サンパウロ	1,280	1,422	1,440	1,470	1,319
パラナ	1,286	1,149	1,013	1,259	1,252
マツト、グロソ	660	1,083	1,267	1,446	1,182

出所：IBGE

(2) 国内市場

生産物は50%が加工原料として工場に出荷され、30%が豆の状態での輸出用、10%が国内の食用に消費され残りの10%が次期植付種用として保管される。工場に出荷される分は落花生油及びそのしぼり粕として国内消費と海外輸出にも向けられるので、輸出量は更に増大する。輸出工場の問題点としては、生産の減少から原料不足に見舞われていることで政府もその現状打開のため78年度には運賃諸掛を含めた輸入価格が国内価格と同水準であることを条件としてパラグアイより1,700トンの輸入を許可した。

78年度に設定された最低保証価格は25kg当りCR7650であったが生産量の不足から工場の買上げ価格はCR2000に達したため農家の関心をひいており、79年度の最低保証価格がCR1080と低目の設定にかかわらず79年の生産増が見込まれている。



出所：CONJUNTURA ECONOMICA 2/79

(3) 国際市場

78年度における世界の落花生生産は1千640万トンであったがブラジルはその2%を占めたに過ぎない。ブラジルに限らず世界の生産も減少しているが、主に北米、中国、セネガル及びアルゼンチンの生産減少が影響している。

ブラジルの海外輸出は落花生(豆)の輸出が毎年減少しているのに代って最近は加工品の落花生油、及びしぼり粕の輸出が伸びてきた。

表125 落花生及び加工品の輸出実績

商品名	重 量 1,000トン				金 額 百万ドル			
	1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
殻つき豆	222	148	189	123	116	74	11.4	7.8
脱殻豆	369	105	121	50	206	58	8.5	3.8
落花生油	37.3	92.8	47.8	58.8	31.8	59.7	38.4	56.7
計	96.4	118.1	78.8	76.1	54.0	72.9	58.3	68.3

出所：CACEX

輸出先国は落花生(豆)では殻つきがハンガリー、日本等9ヶ国、脱殻ものがスペイン、アルジェリア等13ヶ国、食油の方はオランダ、ベネズエラ等6ヶ国に輸出されている。

表126 落花生及び加工品の輸出先国及び金額 単位 百万ドル

殻つき落花生		脱殻落花生		落花生油	
輸出先国	金額	輸出先国	金額	輸出先国	金額
ハンガリー	2.2	スペイン	4.6	フランス	19.2
日本	0.7	フランス	1.0	ベネズエラ	14.0
イタリア	0.3	イタリア	0.7	オランダ	13.4
トリニダードトバゴ	0.2	オランダ	0.4	西独	5.3
英国	0.1	ポルトガル	0.2	英国	3.4
その他の国	0.3	その他の国	0.9	その他の国	0.2
未分類	-	未分類	-	未分類	1.2
計	3.8	計	7.8	計	56.7

出所：CACEX RIO

落花生及び加工品の輸出会社

78年1月～10月実績百万ドル

IND. COM. LOTUS S. A.	11.4
BRASWEY S. A. INDUSTRIA E COMERCIO	16.5
IND. FUDO OLEUS VEGETAIS.	6.8
INDOLMA S. A. IND. OLEOS VEGETAIS	6.6

表127 落花生の生産コスト(1978年度) サンパウロ州

CR/ha

項目	牛馬耕作	機械耕作
人件費	1,650.48	1,126.08
種子	1,083.60	1,229.80
肥料	1,118.25	1,118.25
農薬	515.52	540.08
機械維持費	418.4	1,142.63
梱包、輸送、金利等	367.93	264.46
収穫請負費用	1,347.50	1,674.75
減価償却費	101.02	285.65
1haあたりコスト計	6,226.14	7,381.70
収量 25kg入	56 俵	68 俵
1俵あたりコスト	111.18	108.55

表128 落花生営農収支(1978年度) サンパウロ州

区分	収入		支出		収益	
	1俵単価	総売上高	1俵コスト	1haコスト	1俵あたり	1haあたり
牛馬耕作	150.00	8,400.00	111.18	6,226.14	388.2	2,173.86
機械耕作	150.00	10,200.00	108.55	7,381.70	414.5	2,818.30

出所: INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. A.

13 ジュート

(1) 生産

表129 1978年度 ジュートの生産実績

順位	州別	収穫期	面積1,000ha	収量1,000トン	単位収量kg/ha
1	アマゾナス	6月	100	100	1,000
2	パラ	6月	66	70	1,060
全国計			166	170	1,024

出所: IBGE

アマゾン州とパラ州の2州で生産されているシュートの1978年度生産は前年比52%減の1万7千トンの収穫に止まった。78年度の農産物の中でもっとも大きな減産をみた作物である。このシュートの減産に代ってマルバの生産は前年比6%の増加をみており、6万318トンの収穫をあげた。この結果よりみて年間を通じシュートよりマルバの生産に切り換えられたあとがみられる。シュート減収の理由としては次の点があげられている。

- (1) アマゾン地方において従来収穫後払いであった種子代金が現金払いの方法に切り換えられたため種子の入手が困難となった。
- (2) 種子が古く発芽率が低下した。
- (3) 生育時に洪水があり、丘地の安全なマルバに切り換えられた。
- (4) マルバの方が収益性において勝れている。

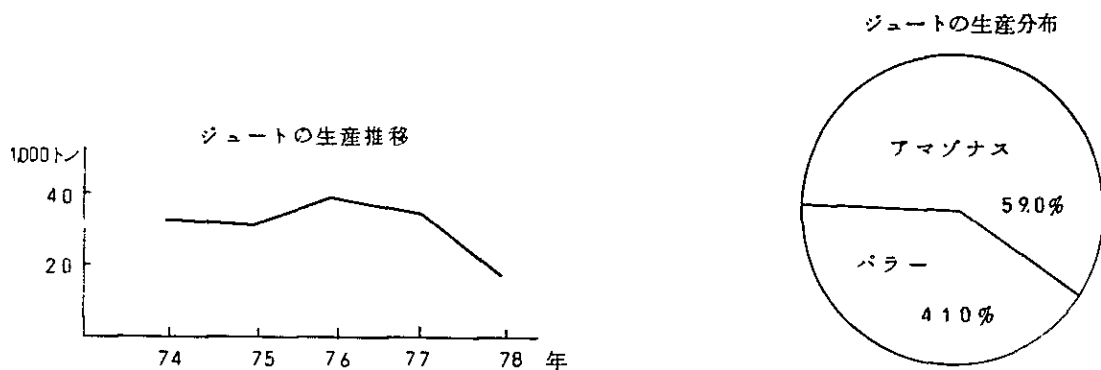


表130 シュート生産の過去5ヶ年間の推移 単位 1,000トン

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
アマゾン	25	24	28	25	10
パラ	7	7	11	10	7
全国計	32	31	39	35	17
面積 1,000ha	38	28	48	35	17

出所：IBGE

表131 シュート生産地の単位数量 kg/ha

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
アマゾン	845	1,267	1,747	1,000	1,000
パラ	1,283	773	1,039	1,060	1,060

出所：IBGE

(2) 市場

ジュートの加工面では従来原料の不足から30%の遊休施設があり100%の操業は行なわれていないといわれる。78年度は生産の減少から工場の稼働率が更に減少したため、CFP（生産融資委員会）は3千トンの手持ちストックを放出し工場の原料供給を行った。

しかしながら国内の需要面でも中南部地方における農産物の減少から梱包用に使用される麻袋の需要は伸びずCFPが買い入れた1千100万俵（麻袋）でようやく息をついた状態であった。このため価格も低調で最低保証価格のkg当り平均CR572をわずかに上回るCR650に終わっている。

輸出面も重要性は少なく長年にわたって隣国のアルゼンチンに4千トン程度の輸出が続いているだけである。

14 サイザル麻

(1) 生産

表132 1978年度 サイザルの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積 1,000ha	収量 1,000トン	単位収量kg/ha
1	パライーバ	12月	1007	1002	995
2	バイア	12月	1250	750	600
3	リオ・グランデ・ド・ノルテ	12月	350	153	436
4	ベルナンブコ	12月	85	109	1285
	その他の州		08	03	
全国計			2700	2017	747

出所：IBGE

1978年度におけるサイザル麻の生産は20万1千700トンで前年比10%の減少であった。サイザル麻がブラジルの農産物の中に占める経済的な地位はとくに重視されるものではないが、この作物がパライーバ、バイア、リオ・グランデ・ド・ノルテ州等東北伯地方の半乾燥地帯（SEMI ARIDO）で、他の農産物が生育しない土地に栽培されている点において意義を持っており、生産地帯では重要な農作物である。ローブ、麻ジュータン、セルローズ及薬品原料として使用され、繊維かすは動物用飼料の補助原料にも使われている。従来、東北伯地方の重要農産物であったこの作物にも東北伯の工業開発が進むにつれて、とくにバイア州カマセリ石油化学基地周辺においてはすでに労働力不足の徴候がみえており、今後の問題点とされている。

表133 サイザル麻の生産 過去5ケ年間の推移

単位 1,000トン

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
パライーバ	71	84	39	103	100
バイア	155	189	98	88	75
その他の州	65	37	29	34	27
計	291	314	166	225	202
面積1,000ha	264	327	281	296	270

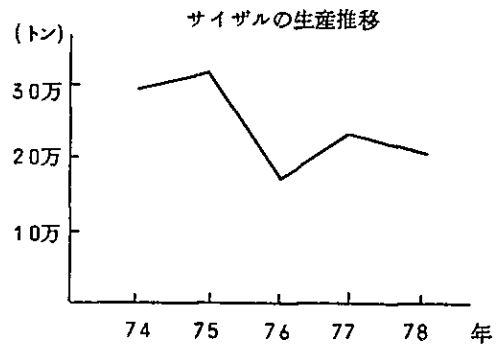
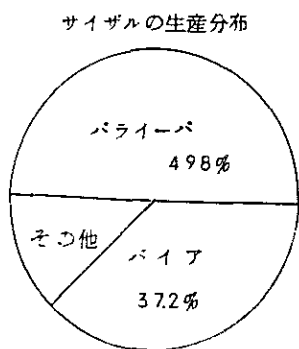


表134 サイザル生産地の単位収量

kg/ha

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
パライーバ	992	949	445	934	995

出所：IBGE

(2) 市場

サイザル市場は石油危機を中心として大巾な変動をみたものの一つで、石油ショック直後に化学繊維の価格が高騰したため天然繊維の需要が一挙に増え、サイザルも一時的にトンあたり\$900-に高騰した時代もあった。しかし、その後輸入国側が買い控え、化学繊維市場も落ち着きをとりもどしたためトンあたり\$400-程度におちて現在にいたっている。

78年の輸出価格は年間平均468ドルであったが、国内需要の増加から国内価格が政府が定めた最低保証価格はもちろん輸出価格をも上廻ったため輸出は昨年を下廻る結果となり、政府は報奨金をあたえて輸出を奨励した程であった。

表135 サイザル麻の輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
452	1049	1190	833	288	351	443	32.9

出所：CACEX

海外への輸出は77年まで毎年増加し4千400万ドルに達したが、78年は上記の理由で3千300万ドルに落ちた。78年1～10月の記録では輸出品の中では繊維がもっとも多く8万2千トン他にロープが6万5千トン輸出された。

輸出先国は例年ポーランドが多くベルギー、ポルトガル、スペイン等であるが、78年には新たにイタリア、中国等への輸出が伸びた。78年の輸出先国は繊維で21ヶ国であった。

表136 サイザル麻の輸出先国及金額 1978年

輸 出 先 国	金 額 百万ドル
ポ ー ラ ン ド	5 7
イ タ リ ア	3 6
中 国	3 1
ス ペ イ ン	2 0
フ ラ ン ス	1 8
そ の 他 の 国	1 1 1
未 分 類	5 6
計	3 2 9

出所：CACEX RIO

サイザル麻の輸出会社と78年1～10月の実績（百万ドル）

J. BANDEIRA S. A IND. COM	6 9
B. OLIVEIRA CIA LTDA	3 6
WILSON JOSE CARNEIRO CIA LTDA	3 2
HAMILTON RIOS IRMÃO LTDA	3 0

サイザルの工業加工面についてはCIA DE CELULOSE DE BAHIAが世界で初の試みとして、サイザルよりセルローズを抽出する工場の建設を決定しており注目されている。この計画はサイザルより上質用紙の繊維を抽出しようとするもので当初国内市場を満たしたのち海外輸出に伸ばす予定である。投資額としては11億クルゼイロスが予定されており原料確保のため、すでに1万5千ヘクタールの栽培が開始されている。その他CIA DO SISAL DO BRASIL-COSIBRAもバイヤ州リヤジョン、ド、ジャクイッペ（CRIACHÃO DO JACUIPE）市にサイザルしぼり液の工業化の調査を進めており期待されている。

15 煙 草 葉

(1) 生 産

表137 1978年度 煙草葉の生産実績

順位	州 別	収穫期	面積 1,000ha	収量 1,000トン	単位収量 kg/ha
1	リオ・グランデ・ド・スール	3月	1 0 4 0	1 4 0 5	1, 5 3 1
2	サンタ・カタリーナ	3月	9 0 5	1 3 0 3	1, 4 3 9
3	バ イ ア	1 2月	5 2 0	4 9 9	9 6 0
4	ア ラ ゴ ア ス	1 2月	2 9. 6	2 9 0	9 8 1
5	バ ラ ナ	4月	1 7 9	2 5 3	1, 4 1 0
6	ミナス・ジェライス	9月	1 5 2	1 0 6	6 9 5
7	セルジソンベ	1 2月	5 7	6 8	1, 1 8 0
8	サンパウロ	8月	2 1	5 1	2, 4 4 8
	そ の 他 の 州		2 3 6	1 1 8	
全 国 計			3 4 0 6	4 0 9 3	1, 2 0 1

出所：IBGE

1978年度の生産量は前年の35万9千700トンを上廻る40万9千300トンで13.8%の増産であった。国内最大の生産地であるリオ・グランデ・ド・スール州における収穫は、77年の12万2千500トンから14万500トンへと14.7%増、バイア州で2万8千トンから約5万トンに急上昇(77.6%)したことが、78年の生産増をもたらした大きな要因であった。

国内の生産分布は南伯3州が全国の74%を生産し、東北伯のバイアとアラゴアス州が18%のシェアを持っている。これらの生産地帯のうち、リオ・グランデ・ド・スール州のサンタ・クルス・ド・スール市、及びアラゴアス州のアラピラヤ市が南北を代表する生産集中地帯として有名である。

リオ・グランデ・ド・スール州を中心とする南部地方では生産方法が開発され、種々の技術が導入されているが、ブラジル全体ではその生産性は低く1haあたり、1トン以下の場所が多い。北米、日本、カナダのように平均1ヘクタール当り2トンの収穫にはほど遠い状態にある。ブラジルにおけるこの生産性の低さは栽培地が山の傾斜面に多く、しかも各農家の栽培規模が小さいため外国にみられるような機械化が進んでいないためといわれている。

煙草葉の生産分布

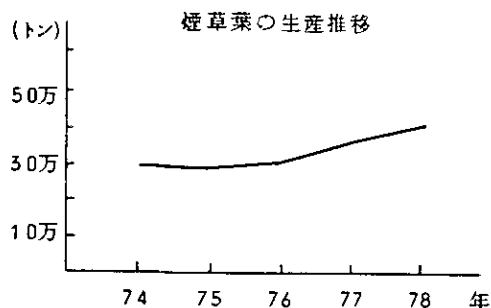
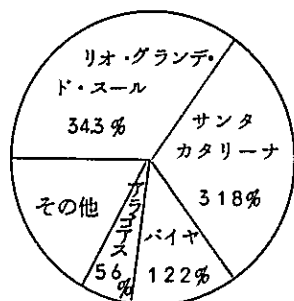


表138 煙草葉生産の過去5カ年間の推移 単位1,000トン

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
リオ・グランデ・ド・スール	118	98	112	123	141
サンタ・カタリーナ	71	79	93	120	130
パイア	32	34	28	28	50
アラゴアス	25	18	20	30	29
その他の州	50	57	49	59	59
全国計	296	286	302	360	409
面積 1,000ha	241	254	281	309	341

出所：IBGE

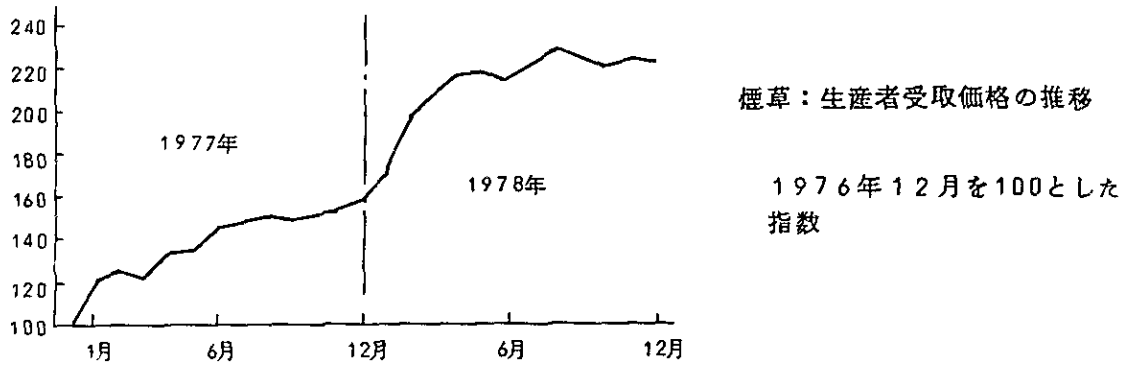
表139 煙草葉生産地の単位収量

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
リオ・グランデ・ド・スール	1,573	1,267	1,253	1,237	1,351
サンタ・カタリーナ	1,635	1,063	1,211	1,488	1,439

出所：IBGE

(2) 市場

煙草葉は大半が煙草工場に吸収されており、生産者価格は安定した上昇を保っている。主要生産地のリオ・グランデ・ド・スール州では77年11月の価格kg当りCR1010から78年11月にはCR1611と59.5%の上昇をみており他の農産物に比して高収入を得たものの中に含まれる。



出所：CONJUNTURA ECONOMICA 2/79

アグロインダストリーの面からみた煙草は工業製品税の徴収による重要な国庫収入源の一つであると同時に輸出面でも重要な輸出農産物で、78年には約2億4千万ドルの外貨を得ており、毎年増加の傾向にある。

表140 煙草の輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル FOB			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
982	1012	1012	1095	1420	1612	1863	2389

出所：CACEX

煙草の輸出は国内最大の煙草工場であるCIA SOUZA CRUZ社を始めとする35社により世界の43ヶ国に対して行なわれており、英国、北米、西独等への輸出が大きい。輸出平均価格は77年度のトンあたり平均\$1,85200から78年度には\$2,17983へと17.7%の上昇をみており輸出量の82%増加に対し輸出金額の28.2%増加という結果を得た。

なお、78年度には農務省布告875号によって従来の格付方法を3段階から4段階に区分し、中央の部分にある12枚の葉を2分して上部6枚を最高級品に定めた。

表141
煙草の輸出先国と金額
(1978年度)

輸出先国	輸出金額百万ドル
英 国	526
北 米	296
西 独	228
イ タ リ ア	204
ス ペ イ ン	151
その他の国	761
未 分 類	223
計	2389

出所：
CACEX RIO

主要輸出会社及び78年1月～10月の実績（百万ドル）

CIA SOUZA CRUZ INDUSTRIA E COMERCIO	545
TABACO BRASILEIRA LTDA	299
LIGETT MYERS BRASIL CIGARRO LTDA	239
VERA FUMO S. A	190

16 ピメンタ・ド・レイノ

(1) 生産

表142 1978年度ピメンタ・ド・レイノの生産実績

順位	州別	収穫期	面積1,000ha	収量1,000トン	単位収量kg/ha
1	パラ	11月	123	442	3,600
2	パラíba	11月	09	02	224
3	マツト・グロッソ	9月	01	01	1,370
	その他の州		36	09	
全国計			169	454	3,540

出所：IBGE

アマゾン地方のパラー州に全国の97%の生産が集中するピメンタ・ド・レイノの1978年度生産量は4万5千400トンで前年比26%の増加であった。

ブラジルは世界でも有数のピメンタ生産国である。その生産高は国内市場ではとくに重要性をもつものではないが、その生産がごく一部の地区に限られていながら、ブラジルの名高い輸出品であるエピブラジル・ナツトや落花生よりも輸出高が高いという点で大きな重要性をもつ農産物である。

ピメンタ・ド・レイノ生産分布

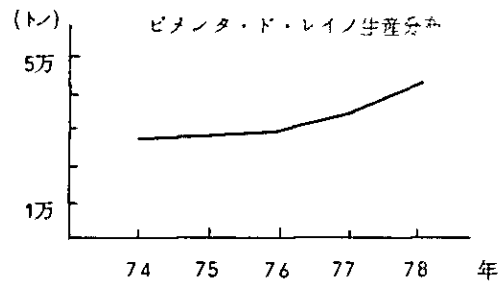
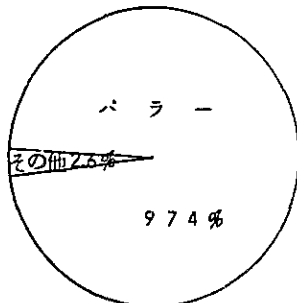


表143 ビメンタ・ド・レイノ生産の過去5ヶ年間の推移

単位 1,000トン

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
バラ	27	27	28	35	44
その他の州	1	2	2	1	1
全国計	28	29	30	36	45
面積 1,000ha	8	9	12	13	17

出所：IBGE

表144 ビメンタ・ド・レイノの単位収量 kg/ha

主要生産地	1974	1975	1976	1977	1978
バラ	3,901	3,895	3,454	3,713	3,600

出所：IBGE

② 市場

ビメンタ・ド・レイノは肉缶詰工場の調味料としてもっとも多く用いられるのでその消費量の多寡がビメンタ価格にひびいてくる。と同時に生産物の大半が海外に輸出される商品であるため外国での需要動向が直接影響する商品でもある。1978年の国際相場は77年度のブランドの収穫が遅れ、78年の1～2月に販売されたがこれが東洋産のものとぶつかり供給過剰を呈したのと、肉缶詰工場での使用方法が従来の粉末ビメンタからビメンタ油に変わってきたためビメンタ自体の需要が減り77年の輸出価格1キロ当たり\$223から78年はCR1.99へと下落した。これを反映した国内市場でも生産者の受取価格はkg当たりCR21～22と低いものであった。

この国際価格のほか、生産面で直面している問題点はビメンタの生産性をおとすFUSARIOSEという病気の蔓延がある。1978年度は苗や支柱の衛生管理と、天候にも恵まれて湿気が少なかったため防止できたが、将来蔓延の危険性があり対策が急がれている。

表145 ビメンタ・ド・レイノ輸出実績

区分	重量 1,000トン				金額 百万ドル FOB			
	1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
黒ビメンタ	151	186	160	254	235	292	335	478
白ビメンタ	28	16	17	46	57	34	60	12.0
計	17.9	202	17.7	300	292	32.4	395	598

出所：CACEX

78年度におけるビメンタの海外輸出は25の輸出業者によって黒ビメンタが28ヶ国、白ビメンタが24ヶ国に向けて行なわれた。輸出先国では北米が37%を占め、モロッコ、西独、フランス等が多く白ビメンタはアルゼンチンに多く(17%)輸出されている。

表146 ビメンタ・ド・レイノ輸出先国と金額(1978年度)

黒ビメンタ		白ビメンタ	
輸出先国	金額百万ドルFOB	輸出先国	金額百万ドルFOB
北米	17.8	アルゼンチン	1.9
モロッコ	5.1	西独	1.5
フランス	3.6	フランス	1.3
ポーランド	3.4	英国	0.8
東独	3.1	北米	0.6
その他の国	7.2	その他の国	1.2
未分類	7.6	未分類	4.7
計	47.8	計	12.0

出所: CACEX RIO

主要輸出会社と1978年1月~10月実績(百万ドル)

PROPIRA S. A. AGROPECUARIA IND.	11.0
COOPERATIVA AGRICOLA MISTA TOMEAÇU	5.6
JOSÉ VALENTE MOREIRA E CIA	4.4
EXP. IMPERIAL LTDA.	5.1

17 玉ネギ

(1) 生産

表147 1978年度玉ネギの生産実績

順位	州別	収穫期	面積1,000ha	収量1,000トン	単位収量kg/ha
1	サンパウロ	11月	1.62	22.48	13.877
2	リオ・グランデ・ド・スール	2月	1.98	11.85	5.985
3	ベルナンブコ	10月	5.2	5.34	10.220
4	サンタ・カタリーナ	1月	5.7	4.71	8.234
5	パラナ	2月	4.4	1.67	3.806
6	バイア	12月	2.7	1.43	5.400
7	ミナス・ジェライス	11月	1.9	1.14	5.870
	その他の州		1.1	4.0	
	全国計		57.0	49.02	8.605

出所: IBGE

1978年の玉ねぎ生産は49万トンで前年とほぼ同水準の収量であった。地域的には主要生産地のリオ・グランデ・ド・スール州において植付時期(77年6~8月)に降雨が多く、収穫期にはMAL DE SETE VOLTAS と呼ばれる病害があったため単位収量を落とし大巾な減収をみており、ベルナンブコ、サンタ・カタリーナ、パラナ等の主要地区でもCR800~CR3,000-に高騰した種苗の高値や、肥料に対する40%の補助打ち切りなどが影響して生産が落ちたが、サンパウロ州の増産によって全国的な減収をまぬかれた。

玉ねぎの生産分布

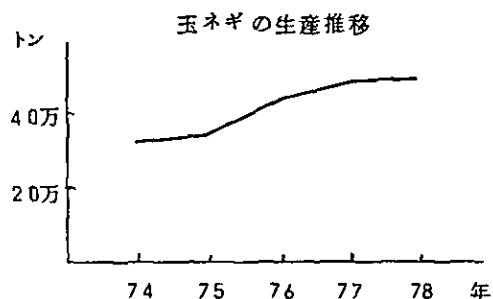
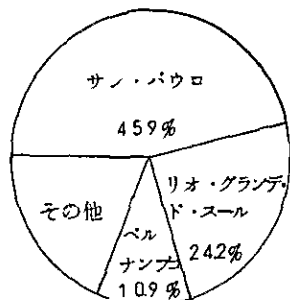


表148 玉ねぎ生産の過去5ヶ年間の推移

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サンパウロ	76	99	134	170	225
リオ・グランデ・ド・スール	136	136	136	148	119
ベルナンブコ	23	15	70	71	53
サンタ・カタリーナ	47	38	43	50	47
パラナ	32	35	26	25	17
その他の州	22	24	21	25	29
計	336	347	430	489	490
面積 1,000ha	53	52	60	65	57

表149 玉ねぎの単位収量 kg/ha

生産地	74	75	76	77	78
サンパウロ	7,000	8,401	9,674	11,826	13,877
リオ・グランデ・ド・スール	7,068	7,131	6,819	6,587	5,985
ベルナンブコ	9,000	8,496	12,320	12,980	10,220
サンタ・カタリーナ	7,629	7,572	7,229	7,273	8,234
パラナ	3,900	3,800	3,673	3,553	3,806

出所: IBGE

(2) 市場

1978年度の玉ネギ市場は年間を通じて問題の多い年であった。国内の大消費市場では毎年5月からリオ・グランデ・ド・スール州産の玉ネギを消費するが、この産地の減収から供給が間に合わず1kg当りCR400の高値を呼んで消費者のはげしい批判の中に市場を混乱させたことから始まる。当局はこの事態を収拾するためサンフランシスコ流域やサンパウロ州ピエダーデ地区の出荷を急ぐよう要請し、関税政策審議会はチリー及びアルゼンチンより3万5千トンまでの輸入を100%の予託金免除で許可し価格の抑制を図った。

下半期に入ると消費市場価格はCR110まで落ちたがこの価格でも十分でないとして当初5月末までを期限とした輸入は10月まで延期されたが、やがてサンフランシスコ地域やサンパウロの一部の出荷が始まると価格は急激に落ち込み、生産者の手取りはkg当りCR3.50となって今度は生産者側が生産コストを割るものであると無計画輸入を行った政府をはげしく批判した。

サンパウロ及ミナス地区の収穫が本格化する11月の中旬には、ついにサンパウロの中央市場で50万俵が腐敗したり、12月にはリオで80トンの新鮮な出荷物が捨てられたというニュースも流され惨憺たる結果に終わった。

玉ネギは毎年生産の多寡によって市場が混乱する商品であるが、これまでとられてきた政策は値が上れば慌てて輸入し、値が下ればそのまま見過すといった、その場かぎりの措置で生産者の立場に立った根本的な問題の解決が図られていない。優良種子の安価な供給によるコストダウン、冬期の保存設備による長期的価格のコントロールといった措置はいまだにとられていない。

問題の種子については、ようやく78年6月にノルデステ銀行がサンパウロ農業研究院の協力のもとに610万ドルの資金をもってサンフランシスコ流域地方の農家を対象に種子の生産を行なうための資金援助を行なうようになったが、このような措置が全国的な規模で早急に行なわれることが期待されている。

(3) 生産コスト及び営業収支

サンパウロ州農務局、農業経済研究所が発表したサンパウロ州における玉ネギ栽培の生産コスト及び営業収支は次の通りである。

表150 玉ネギの生産コスト(1978年度サンパウロ州)

地域 農耕形態 コスト	(A)カーザプランカ	(B)ソロカーバ	(C)ソロカーバ	(D)ソロカーバ	(E)ソロカーバ
	牛馬及機械使用	牛馬耕作	機械耕作	牛馬耕作	機械耕作
人件費	6,095.60	8,837.40	7,690.38	9,876.90	10,852.26
種苗費	5,600.00	6,498.00	6,498.00	9,232.00	9,232.00
肥料	4,388.60	3,556.05	4,790.85	4,245.75	7,436.70
農薬	1,376.86	2,318.47	1,219.87	1,161.57	1,913.68
機械維持費	1,417.60	3,309.6	2,277.29	824.93	3,694.43
梱包金利等	2,001.09	2,579.18	2,320.05	2,216.47	2,622.27
減価償却	380.64	1,803.2	514.36	343.17	885.43
1haあたりコスト計	21,260.39	24,300.38	25,310.80	27,900.79	36,636.77
収量 45 kg入	248 俵	338 俵	366 俵	284 俵	408 俵
1俵あたりコスト	85.73	71.89	69.16	98.24	89.80

出所: INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA

表151 玉ネギの営農収支

単位 CR

地区別	収 入		支 出		収 益	
	1俵単価	総売上高	1俵あたりコスト	1haコスト	1俵あたり	1haあたり
A	194.00	48,112.00	85.73	21,260.39	108.27	26,851.61
B	194.00	65,572.00	71.89	24,300.38	122.11	41,271.62
C	194.00	71,004.00	69.16	25,310.80	124.84	45,693.20
D	194.00	55,096.00	98.24	27,900.79	95.76	27,195.21
E	194.00	79,152.00	89.80	36,636.77	104.20	42,515.23

出所: INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA

18 トマト

(1) 生産

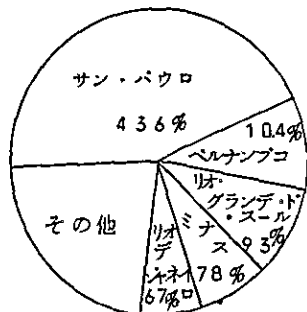
表152 1978年度 トマトの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積 1,000ha	収量 1,000トン	単位収量kg/ha
1	サンパウロ	11月	247	6332	25,636
2	ベルナンブコ	9月	67	1507	22,660
3	リオ・グランデ・ド・スール	2月	60	1345	22,417
4	ミナス・ジェライス	12月	3.6	1130	31,729
5	リオ・デ・ジャネイロ	11月	22	96.6	43,803
6	バイア	12月	52	91.0	17,500
7	エスピリット・サント	12月	09	43.5	50,000
8	パライーバ	11月	13	433	33,700
9	ゴヤス	10月	10	400	40,816
10	パラナ	5月	07	337	45,392
	その他の州		29	723	24,931
全国計			552	1,4518	26,280

出所：IBGE

1978年度のトマト生産は、サンパウロ州内において霜による工業原料用トマトの被害減収があったが、全国的な植付面積の拡大と単位収量の増加によって145万2千トンの収穫をあげ前年を12%上廻った。生産地区はサンパウロ州が全国の40%を占めてもっとも大きく、サンパウロ州産トマトの35%は加工用原料(トマトケチャップ)65%が州内及び州外とくにリオ市場に供給される。中南部地方はリオ州を除いて自給態勢にあるが北部東北部では自給出来ず他州よりの供給を受けている状態のためこの地帯での生産増加が図られており、78年にはベルナンブコ農牧研究公社が東北伯に広がる半乾燥地帯(SEMI ARIDO)での灌漑栽培用新品種の開発を行っている。

トマトの生産分布



トマトの生産分布

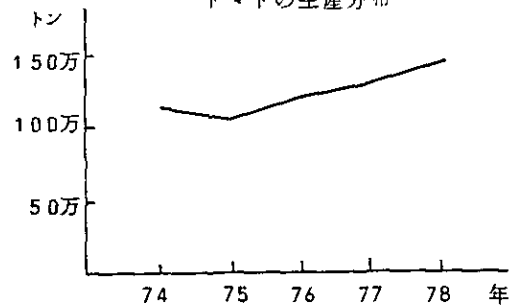


表153 トマト生産の過去5ヶ年間の推移

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サンパウロ	610	521	583	614	633
リオ・デ・ジャネイロ	60	75	75	110	97
リオ・グランデ・ド・スール	59	67	76	103	135
その他の州	416	387	444	466	587
全国計	1,145	1,050	1,178	1,293	1,452
面積 1,000ha	53	47	47	51	55

表154 トマト生産地の単位収量 kg/ha

サンパウロ	20,761	21,528	25,138	26,803	25,636
リオ・デ・ジャネイロ	40,524	42,000	42,000	40,669	43,807
リオ・グランデ・ド・スール	22,188	22,631	23,411	20,255	22,417
ベルナンブコ	22,000	20,000	18,716	16,900	22,660

出所：IBGE

(2) 国内市場

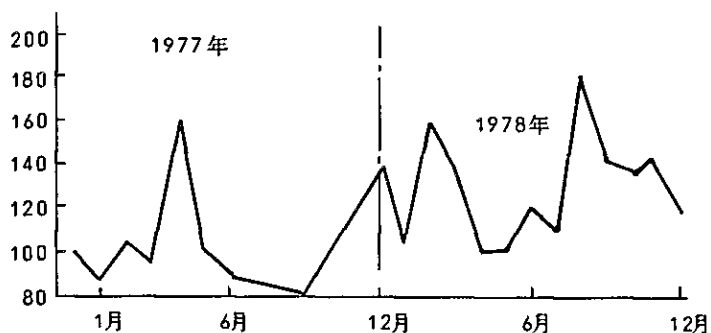
サンパウロ州を中心とする生産物は、35%が加工用原料、65%が生食用となっている。生食用トマトの消費量は最近非常に増加しており、1人1年当りの消費量は12kgといわれる位需要が大きく、穀物類と異って長期保存が困難なため供給量の如何によって価格の変動がはげしい商品の1つである。

国内の消費市場として最も大きい場所はサンパウロ市を含むサンパウロ州で全国取引量の50%を取扱っており、リオ市場は7%である。したがって価格の変動はサンパウロ市においてもっとも顕著である。

全国の都市の中で自給態勢になく他よりの補給を受けている場所としては、アマゾナス州のマナウス市、パラ州ベレン市、マラニョン州サン・ルイス市、ピアウイ州テレジーナ市、アラゴアス州マセイオ市等東北、北伯の消費都市、中南部ではリオ・デ・ジャネイロ市が不足し、エスピリットサント州やサンパウロ州より補給を受ける。この生産州より他州への移送が生産州の価格を変動させる原因をも作っている。したがって非常に取扱いの難かしい商品、つまり農家にとって営農成果は作柄を前提としながらもいかに販売の好機を掴むかにかかっている。

トマト：生産者受取価格の推移

1976年12月を100とした指数



出所：CONJUNTURA ECONOMICA 2/79

左図にみられるように1977年には3月から4月にかけて価格が高騰した。78年度にはこの高値を狙って2月の出荷がにぶり3月を待った。ところが2月にはリオ市場が極度に不足しサンパウロ産トマトがリオ市場に回送され、サンパウロ市場も品不足となって暴騰した。この価格に刺戟されて一斉に出荷が始まった3月に暴落している。同様の事態は8月にも繰返えされている。

年間を通じた価格は各地区毎に異っており北伯地方において高く、サンパウロ州はもっとも低い価格であった。

表155 トマトの生産者受取価格年間平均 CR/1 kg

州 別	1 kg 当り 価格	前年 比
ア ク レ	2 0 0 5	5 1 2 %
ア マ ソ ナ ス	1 2 8 3	2 8 4
バ イ ア	8.0 1	7 8 8
ミナス・ジェライス	4 6 2	7 9 8
リオ・デ・ジャネイロ	5 0 1	3 6 9
サン・パウロ	3 1 9	9 6
リオ・グランデ・ド・スール	5 5 8	3 9 5
上半期の平均価格	1 箱 8 9 9 1	
加工用トマト	1 kg 1 1 2	

出所：

CONJUNTURA ECONOMICA

(3) 国際市場

FAOの統計によると世界のトマト生産は1961～65年当時の2千600万トン程度から1977年には4千500万トンへの急激な上昇ぶりである。世界の生産国では北米がもっとも大きくブラジルは収量で世界6位の地位にある。とくに国際間の影響をうけるのは加工品であるトマトケチャップでブラジルよりも毎年輸出されている。トマトケチャップの国際価格は1974年にFOBサントス港でトンあたりCR800～1,000にまで上昇したがこれを

頂点として下降し77年以降はCR600前後に落ち着いている。

1978年度におけるブラジルの加工用トマトの生産はサンパウロ州における天災による被害から工場側に原料不足を生じたため、DRAW-BACK制度により、原料の輸入→国内加工→製品の輸出が実施された。

表156 世界のトマト生産 (1977年度)

生産国	面積 1000ha	収量 1000トン	反収 1トン/ha
北米	210	8.160	38.8
イタリア	105	3.120	29.7
トルコ	86	2.800	32.5
スペイン	73	2.179	29.8
ギリシャ	32	1.560	48.7
ブラジル	51	1.291	25.3
メキシコ	50	964	19.3
ボルトガル	27	790	29.2
アルゼンチン	30	550	18.3

出所：FAO

(4) 生産コスト及営農収支

表157 トマトの生産コスト(1978年サンパウロ州) 単位CR

項目	(A) 生食用普通種	(B) 生食用カキ種	(C) 加工用トマト
人件費	52.65152	50.43244	5.604.87
種子種苗	21356	1.36339	1.40420
肥料	18.54235	20.80063	3.30924
農薬	6.17766	5.07041	2.19908
機械維持費	5.04422	3.03201	4.63105
梱包、輸送、金利等	42.10341	33.13393	51900
減価償却費	2.80184	2.12189	1.26314
1haあたりコスト	127.53456	115.95470	18.93058
収量 kg入箱	1.758箱	930箱	182トン
1箱あたりコスト	7255	12468	トンあたり 1,04014

出所：INST TUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. P.

表158 トマトの営農収支

種類	収 入		支 出		収 益	
	1箱単価	総売上高	1箱コスト	1haコスト	1箱あたり	1haあたり
A	7988	140,42900	7255	127,53456	733	1289444
B	11584	107,33120	12468	115,95470	-884	-8,22350
C	トン当り 1,17000	21,29400	トン当り 1,04014	18,93058	(トン) 12986	2,36342

出所：INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. P.

19 オレンジ

(1) 生産

表159 1978年度オレンジの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積 1,000ha	収量 百万個	単位収量 個/ha
1	サンパウロ	12月	3263	28,465.0	87,225
2	リオ・デ・ジャネイロ	12月	263	2,041.5	77,523
3	リオ・グランデ・ド・スール	12月	238	1,722.5	72,374
4	セルジッペ	12月	149	1,639.0	110,007
5	ミナス・ジェライス	12月	224	1,617.4	72,318
6	バイア	12月	96	972.9	72,180
7	サンタ・カタリーナ	12月	37	472.7	128,307
8	マラニョン	12月	36	411.8	115,892
9	パラナ	12月	45	380.7	84,032
10	ベルナンブコ	12月	53	376.6	71,184
	その他の州		142	990.9	69,780
全国計			4546	39,091.0	85,998

出所：IBGE

1978年度のオレンジ生産は約390億個、1箱250ヶ40kg入りの箱数にすると約5千636万箱で前年比9%の増加であった。生産地は全国に分布しているが全生産量の70%はサンパウロ州に集中しており、サンパウロ州の生産が全国生産量に影響する。毎年オレンジ生産の良否が決定するのは8月～11月にかけての開花～生育期で、この時期に降雨が多いと幹からの発芽が多く、また乾燥が続くと水分不足で果実の生育に影響する。78年度はこの時期の天候がサンパウロ州においてよく生産増の原因となった。

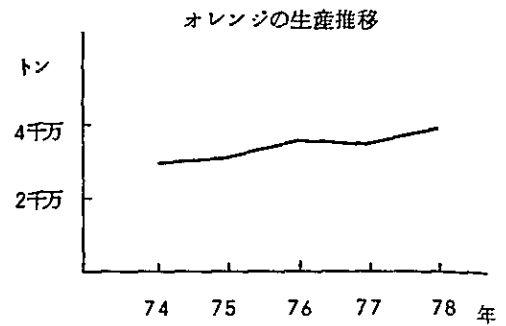
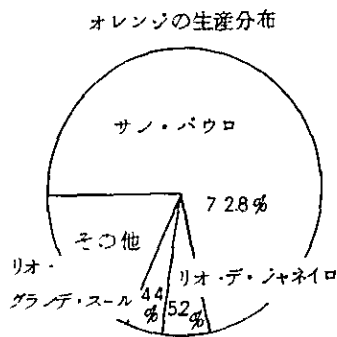


表160 オレンジ生産の過去5ヶ年間の推移 単位 百万個

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サン・パウロ	19,250	21,175	25,550	25,100	28,465
リオ・デ・ジャネイロ	3,028	2,693	2,693	2,663	2,042
リオ・グランデ・ド・スール	1,229	1,597	1,659	1,716	1,723
セルシッペ	539	562	744	940	1,639
その他の州	5,549	5,559	6,024	3,425	5,222
計	29,596	31,586	36,670	35,822	39,091
面積 1,000ha	350	403	423	422	455

出所: IBGE

表161 オレンジの単位収量 単位 個/ha

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
サン・パウロ	90,375	77,723	90,497	87,638	87,225
リオ・デ・ジャネイロ	76,606	75,073	75,074	75,000	77,523
リオ・グランデ・ド・スール	63,036	71,706	72,130	76,250	72,374
セルシッペ	79,900	66,499	68,300	72,000	110,007

(2) 国内市場

国産オレンジはその半分が青果のまま、半分がジュース加工原料とされる。78年の例で見ると生産量約1億5千万箱に対してジュース工場の原料需要は約7千500万~7千800万箱と推定された。

1箱(250ヶ入り約40kg)の原料から製造される濃縮ジュースは約3.6kgで7千800万箱からは約28万トンのジュースを得る(78,000,000箱×3.6kg=280,800トン)

市場は青果においては国内市場が圧倒的に多く、ジュースの方は、77年までは約20万トンが輸出されてきたが78年には33万トンに急激な増加をみている。以前は青果の方が多く輸出されていたが果物が輸送上問題が多いのと、輸入国側でもジュースの方を求める傾向が重なって76年以降はジュース輸出高が圧倒的に多くなり、その金額も3億ドルを越えるように

なり重要輸出産物の1つとなっている。と同時にオレンジの国内価格は国際価格に直接影響を受けるようになってきた。

表162 オレンジ及びジュースの輸出実績

区 分	重 量 1,000トン				金 額 百万ドル			
	1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
青 果	730	364	356	454	118	53	53	70
ジュース	180.9	2098	2135	3356	82.2	1009	1170	332.6
計	253.9	2462	2491	3810	940	1062	1223	3396

出所：CACEX

オレンジの輸出は5輸出会社により12ヶ国に向けて行なわれており、毎年オランダへの輸出が多くを占めている。ジュースの方は10社によって海外23ヶ国に向けて輸出されているが、北米、西独、カナダ等の輸入量が多い。

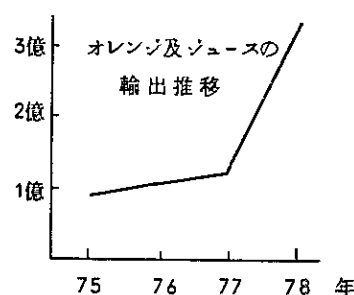


表163 オレンジ(青果)の輸出 (1978年度)

輸 出 先 国	金 額 百万ドル
オ ラ ン ダ	40
東 独	18
英 国	04
フィンランド	02
セネガル	01
未 分 類	03
そ の 他 の 国	02
計	70

出所：CACEX RIO

オレンジ(青果)の主要輸出会社と78年1月～10月の実績 (百万ドル)

CITRICULA BRASILEIRA LTDA.	44
FAZENDA SETE LAGOAS AGRIC. LTDA	22

オレンジ・ジュースの主要輸出会社と78年1月～10月の実績 (百万ドル)

SUCOCITRICO CUTRALE S. A	97.4
CITROJUCO PAULISTA S. A	72.2
FRUTESP S. A. AGRO. IND.	33.1
CARGILL AGRIC. S. A	23.1
CITRISUCO LIMERA IND. COM. SUCO LTDA	8.4

表164 オレンジ・ジュースの輸出先国と金額 単位 百万ドル

輸出先国	1975	1976	1977	1978
北米	9.3	7.9	44.6	97.1
オランダ	18.9	32.5	43.1	29.4
西独	20.0	21.0	25.4	19.3
カナダ	9.5	7.4	15.5	30.9
スウェーデン	7.8	8.6	14.9	14.6
その他の国	16.7	23.5	26.5	141.3
計	82.2	100.9	117.0	332.6

出所：CACEX RIO

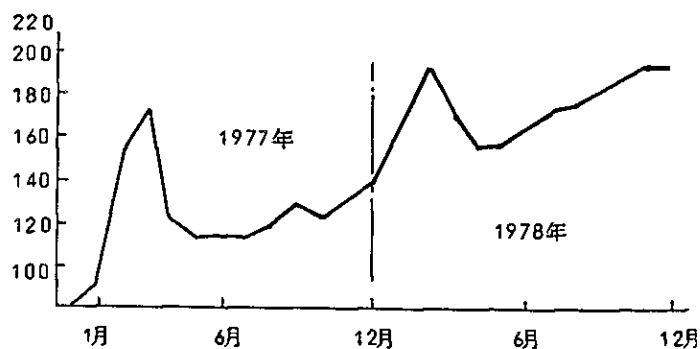
国内価格は多少の変動をみながらも平均して上昇している。77年には国内での減産と国際価格の上昇によって生産者受取価格が1箱あたりCR 30に達したが、78年には豊作が予想され、ジュース工場の買付けが遅くなる見通しがあって当然価格の下落が予想されたため、政府当局(CACEX)が介入し1箱当りの価格を農場渡しCR 36、工場の倉庫渡しCR 41.50、工場渡しCR 43と定めた。

一方、青物市場の方は、サンパウロ市の場合を例にとると77年3月に卸価格1箱当たりCR 90に上がったあと7月にCR 42に下り、78年2月3月にはふたたびCR 80に上昇したあと7月にはCR 45に下がっている。

小売価格の方は1打当り(78年)CR 10前後で3月にCR 115.6、5月CR 84.0であった。

オレンジの生産者価格

1976年12月を100とした指数



出所：CONJUTURA ECONOMICA 2/79

77年の国内価格を刺激したジュースの国際価格は76年のトンあたり\$ 480から77年には\$ 829と高騰しており78年の輸出平均価格もトンあたり\$ 991.00であった。

(3) 生産コストと営農収支

サンパウロ州農務局、農業経済研究所の調査によると、オレンジの収穫開始まで4年間の造成費及び収穫開始後の年間コストは次の通りである。

表165 オレンジ園造成1 ha 当り200本(4年間)の費用

1978年サンパウロ州 単位 CR

人件費	苗	肥料	農薬	機械維持	その他	減価償却	計
6,246.57	3,750.00	2,775.71	2,661.65	4,182.86	1,293.44	1,105.81	22,016.04

表166 オレンジ：収穫開始後の生産コスト(1978年サンパウロ州) 単位 CR

人件費	苗	肥料	農薬	機械維持	その他	減価償却	計
2,092.80	-	1,631.34	1,672.29	1,216.40	384.73	1,226.39	8,223.95

表167 オレンジ：収穫開始後の営農収支(1978年サンパウロ州) 1 ha

収量	収 入		支 出		収 益	
	1箱あたり	総売上高/1ha	1箱あたり	1haあたり	1箱あたり	1haあたり
340箱	3000	10,200.00	2419	8,223.95	581	1,976.05

以上の出所：INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. P.

20 バナナ

(1) 生産

表168 1978年度バナナの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積,000ha	収量,000房	単位収量 房/ha
1	セアラ	12月	360	675	1,875
2	サンパウロ	12月	286	535	1,875
3	バイア	12月	320	384	1,200
4	ミナス・ジェライス	12月	323	348	1,077
5	ベルナン・ブコ	12月	171	316	1,844
6	リオ・デ・ジャネイロ	12月	279	268	959
7	サンタ・カタリーナ	12月	171	238	1,387
8	ゴヤス	12月	255	232	910
9	マット・グロソン	12月	102	148	1,448
10	エスピリット・サント	12月	290	116	400
	その他の州		605	858	
	全国計		316.2	411.8	1,302

出所：IBGE

バナナの生産地帯は全国にわたっており、主要生産地もセアラ、パイア、ベルナンブコ州など東北地帯と南東のサンパウロ、ミナス・ジェライス州などに分布し、収量にも大きな開きはなく、生産の集中はみられないブラジル全土に適した作物である。1978年度の生産量は年度当初44万房が期待されていたが、サンパウロ州での強風によるリベイラ川流域の被害(7月末)が影響して全体の生産量は41万2千房に止まった。この収量は前年並みのもので、0.42%の増加であった。

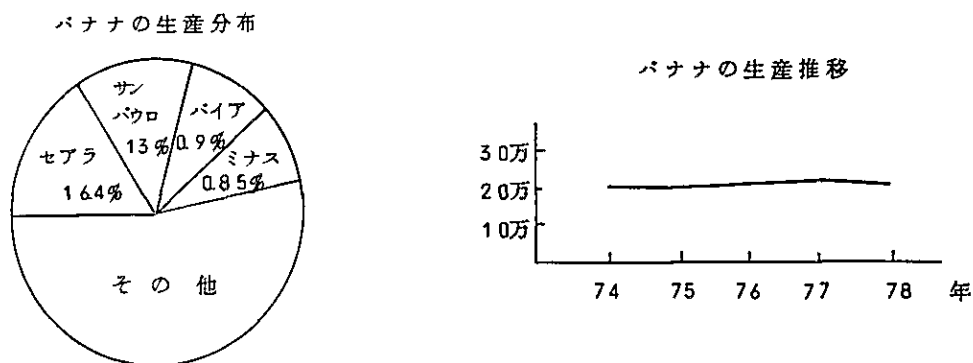


表169 バナナ生産の過去5ヶ年間の推移 単位 1,000房

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
セアラ	67.5	65.6	66.4	67.5	67.5
サン・パウロ	35.4	26.7	35.8	38.6	53.5
パイア	17.5	27.7	32.4	41.1	38.4
ミナス・ジェライス	27.3	42.0	37.3	37.4	34.8
その他の州	205.1	201.7	212.1	225.4	217.6
全国計	352.8	363.7	384.0	410.0	411.8
面積 1,000ha	3100	3137	3151	3416	3162

出所：IBGE

表170 バナナの単位収量 房/ha

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
セアラ	1.875	1.875	1.875	1.875	1.875
サン・パウロ	1.038	0.824	0.824	1.128	1.875
パイア	1.200	1.200	1.200	1.200	1.200
ミナス・ジェライス	0.623	1.059	1.066	1.078	1.077

(2) 市場

ブラジルは世界最大のバナナ生産国であるが海外輸出量は極めて少なく約400万トンの生産量(生産量41万房×1房平均1.06kg=434万6千トン)の中、その2.5%に相当する

10万トン前後が輸出されているに過ぎず残りはすべて国内で消費される。

輸出もアルゼンチン、ウルグアイの隣国2ヶ国だけでその他の輸出は行なわれていない。

表171 バナナの輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル FOB			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
147.4	92.1	111.7	132.5	307	181	191	235

出所：CACEX

表172

1978：バナナの輸出先国と金額

百万ドル

輸出先国	金 額
アルゼンチン	157
ウルグアイ	23
未 分 類	55
計	235

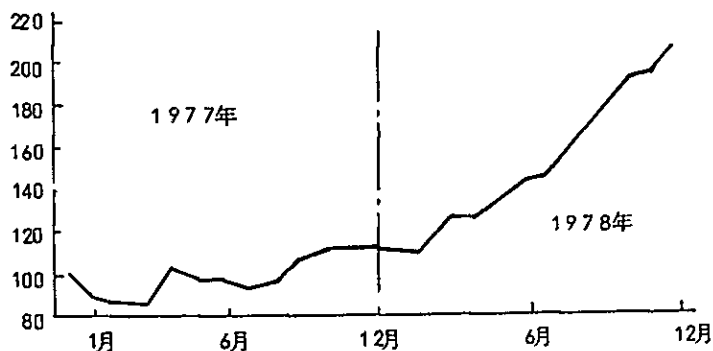
出所：CACEX RIO

主要輸出会社と1978年1～10月実績
(百万ドル)

BINAFRUT LTDA	22
コチア産業組合	17
EL DORADO C AGRICOLA LTDA	15
IRMÃO LEFFA LTDA	13
MARINEI COM. IMP. EXP LTDA	11
その他 23社	

バナナの価格は76年度には一年を通じて低く、77年も引続いてインフレ率を下廻る低迷ぶりであったため栽培農家は十分の手入れを行わず生産意欲の減退から反収の減少をみた。サンパウロ市場ではリベイラ川流域で強風による被害を受けた7月以降ようやく価格の上昇をみてトンあたりCR 3,830に達したが、強風による被害の影響は大きく、生産者の収益は低かった。

この様な天災が生産者の営農安定を破壊し、ひいては栽培の放棄、大巾減収も予想されたため10月末サンパウロ州保険公社(COESP)はリベイラ川流域の栽培者に対して水害、霜、雹、突風に対する損害保険を設定し生産者の保護を開始している。



バナナ：生産者受取価格の推移
1976年12月を100とした指数

出所：

CONJUNTORA ECONOMICA 2/79

表 173 バナナの生産コスト 1 ha あたり CR サンパウロ州 14ヶ月周期栽培

区 分	人件費	苗	肥 料	農 薬	機械維持	金利他	減価償却	計
低 地	5,866.72	-	3,171.44	1,055.34	119.63	616.14	17.46	10,846.73
傾 斜 地	6,113.88	-	4,557.70	1,055.34	152.96	640.64	22.31	12,542.73

出所：INSTITUTO DE ECONOMIA S. P. (IEA)

表 174 バナナの営農収支 サンパウロ州 1978年度

区 分	収 量 トン	収 入		支 出		収 益	
		トン当単価	総売上高	トン当コスト	1 ha 当コスト	トン当り	1 ha 当り
低 地	20	60000	12,000.00	542.34	10,846.73	57.66	1,153.27
傾 斜 地	20	60000	12,000.00	627.14	12,542.73	(-)27.14	(-) 5,427.3

出所：I E A.

21 バインアップル

(1) 生 産

表 175 1978年度バインアップルの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積1,000ha	収量1,000個	単位数量個/ha
1	パライーバ	12月	6.0	107.3	17,814
2	ミナス・ジェライス	12月	5.3	69.6	13,173
3	バイア	12月	4.0	60.2	15,000
4	サンパウロ	12~2月	1.4	27.5	19,331
5	ベルナンブコ	12月	1.9	23.7	12,241
6	リオ・グランデ・ド・ノール	12月	1.9	22.1	11,324
7	アラゴアス	12月	1.0	15.6	15,435
8	エスピリット・サント	12月	0.7	14.7	22,000
	その他の州		3.9	38.5	
全国計			26.1	379.2	14,549

出所：IBGE

1978年度におけるバインアップルの生産は37万9千個で前年比3.2%の増産であった。生産地は東北部のパライーバ州、バイヤ州、南東部のミナス・ジェライス州、サンパウロ州が多くこの4州が全国生産の70%を占める。このうちサンパウロ州は他の3州に比べると収量

において劣るが、東北地方に栽培されている在来種に対し、スムスカイン種（ハワイ産）が多く品質的に勝っている。このスムスカイン種は昔、日系移住者がハワイより持ち帰ったもので茶の場合と同様にその後日系人の間で普及しており、サンパウロ州パウルー周辺の日系人によるスムスカイン種栽培は有名である。

1978年後の生産分布

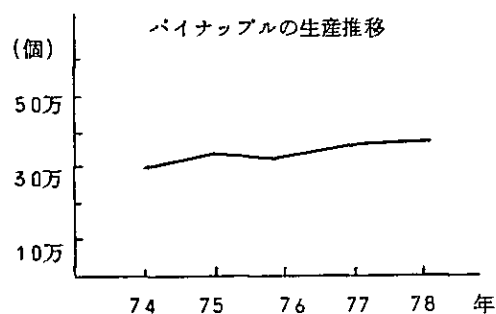
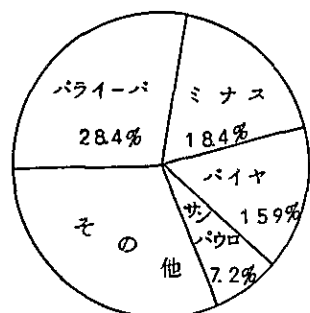


表176 パインアップルの生産過去5ヶ年間の推移 単位1,000ヶ

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
パライーバ	48	51	69	97	108
ミナス・ジェライス	56	66	71	70	70
パイア	30	45	51	60	60
サンパウロ	62	41	35	31	27
ベルナンブコ	36	26	27	28	24

出所：IBGE

表177 パインアップルの単位収量 個/ha

生産地	1974	1975	1976	1977	1978
パライーバ	10,873	15,000	15,000	15,000	17,814
ミナス・ジェライス	10,103	12,124	12,894	13,294	13,173
パイア	10,873	15,000	15,000	15,000	15,000
サンパウロ	11,107	19,380	27,730	19,809	19,331
ベルナンブコ	12,669	9,626	9,626	11,632	12,241

出所：IBGE

(2) 市場

青果の国内消費が大きく、バナナの場合と同様輸出量は少量である。国内市場の方も青果が豊富にあるため缶詰類の需要は少ない。

輸出は隣国のアルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ等に対して行なわれているがアルゼンチンが90%以上を占めており他の国は何らの重要性ももっていない。輸出は小規模ながら年々伸びており78年には350万ドルを輸出しており76年に対して70%、77年に対して40%の増加であった。

表178 バインアップルの輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
70	57	97	120	1.6	1.3	2.5	3.5

出所：CACEX

表179 1978年の輸出先国及金額

輸 出 先 国	金 額 百万ドル
アルゼンチン	1.2
ス ペ イ ン	0.1
英 国	0.01
未 分 類	2.19
計	3.5

出所：CACEX RIO

バインアップルの輸出会社

(1978年1～10月実績 金額百万ドル)

IRMÃO CURTO LTDA	0.2
IRMAO LEFFE LTDA	0.2
ABEL CUNHA IMP. EXP. LTDA	0.1
CIPONABE IMP. EXP. LTDA	0.1
他 16社	

ブラジルのスムスカイン種は気象条件が合ってよく成育し、大きなものになると4kgに及ぶものもあり、甘く果汁が豊富である。このため同様な気象条件にある南米諸国の関心を集めているが、隣国ボリビアでも国内市場とアルゼンチン市場を目指したスムスカイン種栽培の動きがあり、同国の農業地帯サンタ・クルス州の公共事業局では台湾より専門技師を招へいして栽培の指導を受け1974年には約10万本の苗をブラジルに求め、両国間で初めてバインアップル苗のコロンバ市経由陸上輸送による貿易が行なわれた。この苗はサンタ・クルス市郊外のサーベドラ試験場で栽培され好結果を得たため缶詰工場設置の計画が持ちあがり、77年始め更に50万本の苗をブラジルから輸入する計画が立てられた。しかしながらブラジル側では75年の霜害により価格が上昇したため新規植付けが増え、苗不足の状態では商談は成立しなかった経緯があった。

表180 パインアップルの生産コスト(1978年サンパウロ州)

区 分	A. バウル地区 牛馬耕作	B. バウル地区 機械耕作	パーレ、パライーバ地区 両併用
人件費	1 2,2 3 4.7 0	1 0.5 5 5.9 2	1 2.0 1 0 5 6
種苗費	1 0,8 4 6 5 0	1 2,3 7 5 0 0	1 0,5 0 0 0 0
肥料	1,0 7 0 6 8	5,5 5 2 2 0	6,7 5 9 2 0
農薬	3 1 8.6 7	7 7 0 8 1	9 8 8 9 3
機械維持費	6 8 9 9	3,2 1 7 6 2	2,4 7 8 5 1
金利他	2,1 3 2 5 8	2,2 3 0 1 2	2,1 3 2 8 7
減価償却費	1 4 2 8 1	8 1 3 1 1	6 3 9 8 2
1 ha 当りコスト計	2 6,8 2 1 9 3	3 5,5 1 4 7 8	3 5,5 0 9 8 9
収 量	2 1,0 0 0 kg	2 2,2 6 0 kg	2 1,2 0 0 kg
1 kg 当りコスト	1 2 8	1 6 0	1 6 7

出所：INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. P.

表181 パインアップルの営農収支

区 分	収 入		支 出		収 益	
	kg 当単価	総売上高	kg 当コスト	1ha 当コスト	kg 当り	1 ha 当り
A	260	5 2,5 0 0 0 0	128	2 6,8 2 1 9 3	128	2 5,6 7 8 0 7
B	250	5 5,6 5 0 0 0	160	3 5,5 1 4 7 8	090	2 0,1 3 5 2 2
C	250	5 3,0 0 0 0 0	167	3 5,5 0 9 8 9	083	1 7,4 9 0 1 1

出所：INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA S. P.

22 マモナ(ヒマ)

(1) 生 産

表182 1978年マモナの生産実績

順位	州 別	収穫期	面積1,000ha	収量1000トン	単位収量kg/ha
1	バ イ ア	10月	1 9 4 7	1 8 9 6	9 7 4
2	サ ン パ ウ ロ	10月	3 4 3	3 6 6	1,0 6 7
3	パ ラ ナ	8月	2 3 7	3 3 3	1,4 0 7
4	セ ア ラ	12月	3 0 0	1 8 0	6 0 0
5	ベルナンブコ	12月	3 6 9	1 6 5	4 4 7
	そ の 他 の 州		3 1 6	2 2 6	7 1 5
	全 国 計		3 5 1 2	3 1 6 6	9 0 2

出所：IBGE

全般的に低調であった1978年度の農産物の中で顕著な増加をみた数少ないものの一つである。1978年のマモナ生産量は31万6千トンで前年比43%の増産であった。78年の初めに南部が見舞われた乾燥の被害を受けなかったことや、最大の生産地バイヤ州では適期に降雨があつて予定以上の収穫をあげたことなどが全国的な増産を裏付けた。また、東北伯開発計画(POLO NORDESTE)により、東北地方のマモナ生産者への融資が従来よりも容易になったことも生産増大を促がしたものとされている。

表183 マモナ生産の過去5ヶ年間の推移 単位 1,000トン

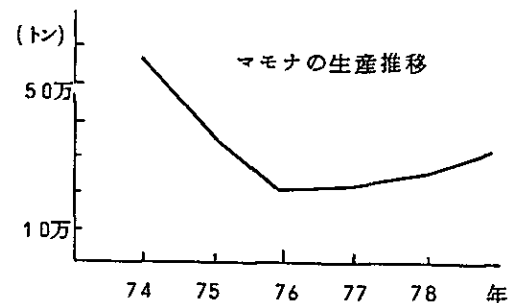
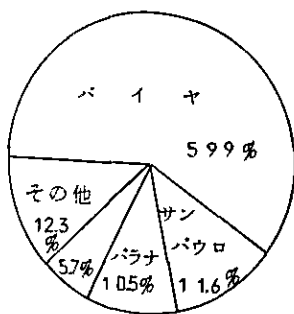
生産地	1974	1975	1976	1977	1978
バイヤ	185	128	92	121	190
サンパウロ	165	38	29	27	37
パラナ	105	97	39	28	33
その他の州	118	91	53	46	57
全国計	573	354	213	222	317
面積 1,000ha	641	399	260	251	351

表184 マモナの単位収量 kg/ha

バイヤ	800	800	800	850	974
サンパウロ	1,214	1,106	1,250	1,492	1,067
パラナ	1,600	1,615	1,400	1,590	1,407

出所：IBGE

マモナの生産分布



(2) 市場

マモナは伝統的な輸出品で、ブラジルは世界最大の生産国兼輸出国でもある。1978年度の生産量31万7千トンに油に換算すると14万ℓであるが、毎年10万ℓ前後が輸出されており大半は海外輸出向けであった。しかしながら最近是国内需要が増加してきており、国産マモナ油の約25%が国内消費にあてられているといわれる。一方国際価格は下降気味であるがいまだに高く輸出も伸びているので今後の価格は国内と国外の需要に応じた市場操作によって維持されていく見通しである。

1978年度の輸出は13の輸出業者によって24ヶ国向けに行なわれたが中でも北米が例年多く、フランス、ソ連、オランダ等がこれに続く輸入国である。

表185 マモナの輸出実績

重 量 1,000トン				金 額 百万ドル FOB			
1975	1976	1977	1978	1975	1976	1977	1978
914	140.9	1003	1407	519	767	875	1100

表186 マモナの輸出先国と金額

単位 百万ドル FOB

輸 出 先 国	1975	1976	1977	1978
北 米	18.6	23.6	32.4	25.3
フ ラ ン ス	8.4	18.2	12.7	15.7
ソ 連	7.8	6.7	7.8	22.0
オ ラ ン ダ	2.8	11.0	16.3	13.8
英 国	5.7	7.1	7.5	6.5
そ の 他 の 国	8.6	10.0	10.8	10.2
1978年未分類	—	—	—	16.5
計	51.9	76.6	87.5	110.0

出所：CACEX

マモナの主要輸出会社と1978年1～10月の実績 (単位 百万ドル)

SAMBRA SOC. ALGODONEIRA NORDESTE BRAS. S. A.	24.7
IND. COM. LOTUS S. A	15.6
IND. MAMONA BAHIA S. A	14.8
BRASWEY S. A	14.0
IND. COELHO S. A.	9.3

(3) 生産コストと営農収支

表187 マモナの生産コスト(1978年度 サンパウロ州) CR/1ha

人件費	種子	肥料	農薬	機械維持費	金利他	減価償却	計
2,388.54	183.6	5,400.0	216.1	591.69	287.15	171.14	4,018.49

出所: INSTITUTO DE ECONOMIA AGRICOLA

表188 マモナの営農収支 単位 CR

収量	収入		支出		収益	
	1俵単価	総売上高	1俵コスト	1haコスト	1俵あたり	1haあたり
50kg入22俵	250.00	5,500.00	182.66	4,018.49	67.34	1,481.51

出所: I. E. A.

23 ゴム

1978年度における天然ゴムの生産量は2万3千700トンで前年比5%の増加、合成ゴムは20万4千トンで8%の増加であった。

これに対する国内消費量はゴムの加工品として2万種以上の製品が製造されているが、なかでももっとも大きな比率を占める自動車用タイヤ及びチューブの原料需要が前年を5%上廻っており、全体的に天然ゴムで7万2千トン、合成ゴムでは22万2千トンの国内消費量であった。このため国内生産で不足する5万5千トンの天然ゴム、3万3千トンの合成ゴムの輸入を必要とした。今世紀の始め世界的ゴムの輸出国であったブラジルもすでに恒常化した輸入国となっており、いまだに国内自給態勢は出来ていない。

国内自給計画については、ゴム管理庁(SUDHEVEA)が1972年よりゴム園再生計画(PROBOR)を進めており、第1次計画では1万8千ヘクタールの植付けと自然ゴム樹1万本よりの採取を目指し、1978年末までに1万4千ヘクタールの植付けが終了し、1万2千本の自然ゴム樹よりの採取が行われるようになっている。

この第1次計画につづいて1977年には第2PROBOR計画が開始されており、この計画では5ヶ年間に12万本の植付け栽培と、自然林1万ヘクタールの利用が目指されており、精製工場も5ヶ所に建設しようとするもので43億クルゼイロの予算が組まれている。1978年末までに実施された第2PROBOR計画の内容としては次のものがあげられている。

- イ. 新たに自然ゴム樹5千本よりのゴム抽出
- ロ. 295ヘクタールの苗圃場の造成と1千100万本の苗の育成
- ハ. EMBRAPA(ブラジル農牧研究公社)との契約により、マナウス周辺の国立ゴムセンタ

一における各種調査

- ニ。EMBRATER（ブラジル農牧指導普及公社）及びCEPLAC（ココア栽培復興計画実行委員会）との協定により、パラ州農科大学における55人の専門技術者の養成
- ホ。ゴム栽培農家に対する生活物資援助をCOBAL（ブラジル食糧配給公社）と合同で実施、このため直営販売所9ヶ所の新設
- ヘ。アクレ及びアマゾン州政府との協定にもとづきゴム栽培者家族の教育衛生の便宜供与。

24 マ ヌ

(1) 生産

表189 ブラジルのマヌ生産量 単位 トン

年度	70/71	71/72	72/73	73/74	74/75	75/76	76/77	77/78
数量	2,394	3,192	4,069	5,000	5,600	6,500	6,916	6,747

出所：サンパウロ市 GUNSAN FIAÇÃO DE SEDA の資料より

表190 マヌ生産の全国分布 %

州別	サンパウロ	パラナ	マツ・グロツ	ミナス	ゴヤス	他	計
比率	90.9	6.7	1.9	0.3	0.1	0.1	100.0

出所：IBGE 1974年統計

1978年度におけるマヌの生産量は6千747トンで前年を25%下廻る収量であった。77年までは毎年急上昇で伸びてきており、ここ3年間に生産の伸びがゆるやかとなっている。国内の生産地はサンパウロ州が圧倒的に多く、90%以上を占めパラナ州がこれに続いているが、いずれも日系農家の多い地域に集中しており、サンパウロ州内でもバウル地方が全国生産量の約半分を占めている。なかでもドウアルテイーナ、アグードスは、その延長線のガリヤ、マリリヤ、バストスと並んでブラジル養蚕の中心地帯である。

マヌの生産に従事する農家戸数はサン・パウロ州2,000戸、パラナ州800戸といわれており全国で約3,500戸と推定されている。

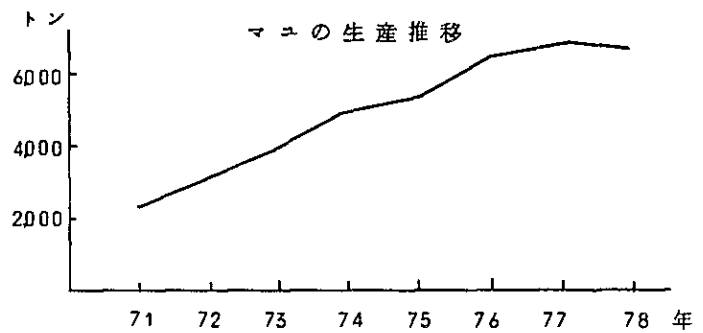
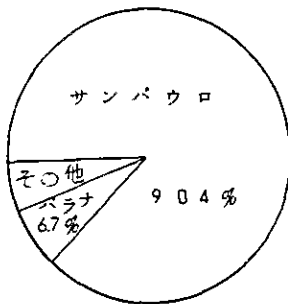
ブラジルの養蚕期間は9月から5月までで、蚕飼小舎の数はサンパウロ州で約3,200戸である。

表191 マユの国内主要生産地域

地域別	生産量トン	主要地区
サンパウロ州	6,177	
パウルー地方	3,243	DUARTINA, AGUDOS, PIRATININGA,
奥パウリスタ地方	1,508	GALIA, MARILIA, BASTOS
アラサノーバ地方	540	GUARAÇA
その他の地方	886	
パラナ州	644	NOVA ESPERANÇA LONDRINA URAI

出所：州企画局 PRODUÇÃO PECUÁRIA MUNICIPAL 1975

マユの生産分布



生産されたマユは全量が生糸の製糸工場に吸収される。ブラジルの場合生糸の歩留りはマユ 6 kg に対して生糸 1 kg の割合である。したがってブラジルの生糸生産量は 78 年度で約 1,200 トン程度である。

表192 ブラジルにおける生糸の生産量 単位 トン

年度	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
トン数	320	390	540	700	1,200	1,200	1,200

出所：SINDICATO DE INDUSTRIA DE FIAÇÃO E TECELAGEM SÃO PAULO

国内の大手製糸工場としては次のものがあげられる。

大手製糸工場		
日本よりの進出企業	所在地	備考
KANEBO SILK BRASIL S/A	パラナ州 CORNERIO PROCOPIO	東綿系

KOBE DO BRASIL IND. E COM LTD.	サンパウロ州 DOARTINA	丸紅系
GUNSAN FIAÇÃO DE SEDA LTDA	" "	郡是糸
SEDA SHOEI - BRATAK S/A	" S. J. RIO PRETO	昭栄、伊藤忠ブラタク合併
MINASILK S/A IND. TEXTIL	ミナス州 PATROCINIO	東洋レーヨンの資本引揚げにより現地の藤原資本となる
現 地 会 社		
FIAÇÃO DE SEDA BRATAK S/A	サンパウロ州 BASTOS	
IND. DE SEDA RIVABEN	" CHARQUEADA	GALIA
FIAÇÃO E TECELAGEM LINENSE S/A	" LINS	
BOMBONATO BOMBIX LTDA	" AGUDOS	
SOSEDA	" DUARTINA	

出所：BRATAK

上記10大工場の生産能力は月間90トン、年間1,080トンであるがほとんどが操業2部制をとっていないので各工場共遊休能力をもっており原料不足に直面しているといわれる。

(2) 国内市場

生糸は大半が輸出され国内市場に廻されるのは少ない。政府は第1次製品を工業加工し付加価値の輸出を行なうよう行政指導しているが国内工業原料として保留されるのは生糸生産量の10分の1程度で、工業化された織物も又輸出されていくので国内市場で販売されるのは極めて少量でありかつ高級品で一部の購買層に限られている。

(3) 国際市場

世界の生糸生産は77年度で年間4万6千800トンで日本、中国、南鮮、インド、北鮮、ソ連に次ぎブラジルは7位の生産国である。

表193 生糸の世界生産量とブラジルの位置

単位 1,000トン

国 名	1975	1976	1977
日 本	202	17.9	160
中 国	150	160	158
南 鮮	43	45	45
イ ン ド	24	25	26
北 鮮	21	21	22
ソ 連	35	34	35
ブ ラ ジ ル	09	10	10
世 界 計	49.4	48.9	46.9

出所：
FAO

生糸とその副産物、加工品の輸出は毎年2千万ドル以上の実績を続けており重要な輸出商品の1つである。商品別にみると生糸そのものの輸出が大きく絹布地がこれに続くが、最近の傾向は生糸の輸出が下降きみなのに反して布地の輸出が伸びている点である。

輸出先国は伝統的に日本が多くを占めているが、最近では台湾や香港などの新しい市場が伸びており注目されている。

表194 生糸類の輸出推移 単位 百万ドル

品名	1975	1976	1977	1978
生糸	200	215	17.1	16.1
絹布地	0.8	2.3	4.4	5.0
その他	1.7	0.7	1.0	0.4
計	22.5	24.8	22.5	21.5

出所：CACEX

表195 生糸の輸出先国と金額 単位 百万ドル

輸出先国	1975	1976	1977	1978
日本	9.1	14.0	6.1	5.4
スイス	5.0	2.2	3.4	2.4
西独	1.5	1.0	2.2	1.4
北米	1.5	1.9	1.1	1.5
台湾	0.1	0.2	0.8	1.8
香港	0.1	0.4	0.8	1.2
その他の国	2.7	1.8	2.7	2.4
計	20.0	21.5	17.1	16.1

出所：CACEX

表196 絹布地の輸出先国 単位 百万ドル

輸出先国	1975	1976	1977	1978
イタリア	0.6	2.3	3.9	3.7
フランス	—	—	0.3	0.7
西独	—	—	0.2	0.5
その他の国	0.2	—	—	0.1
計	0.8	2.3	4.4	5.0

出所：CACEX

輸出価格は生糸で平均kg当 \$ 20. 程度でほぼ安定した価格が続いている。輸出先国別では日本がもっとも高く、77年度で\$ 24.7と平均価格を大巾に上廻っており、輸入量価格ともっとも重要な輸出先国である。

国内価格の方もインフレ率を上廻る上昇をみており1アルケール当りの所得がコーヒーの場合よりも高いといわれており養蚕に転向する農家が増えているが現在の日系1世の時代から2世、3世の代に移る場合、どの程度の関心が持たれるかがもっとも大きな懸念事項である。

表197 マユ 価格 単位CR/kg

1976/77	1977/78	1978/79
33.00	46.00~50.00	63.00

(注) 1級品の価格
出所 BRATAK

25 台湾 桐

(1) 生産

桐の生産状況に関する統計はIBGE(ブラジル地理統計院)IBDF(森林開発庁)、農務局のいづれにもなく、国としての統計は行なわれていない。桐が国の統計の対象とされていないのはブラジルでの歴史が浅く、経済的にも国に貢献するまでに達していないため、重要森林材としての位置を占めるにいたっていないからに他ならない。したがって国内生産状況については関係者や専門家の意見をもとにする以外になく、これらの意見を総合すると推定450万本というのが平均した現時点での植付本数となる。

表198 桐の植付本数

年 度	植付本数 百万本	面積 1,000ha
1971	0.1	0.07
1972	0.6	0.4
1973	1.7	1.1
1974	2.0	2.0
}	}	}
1978	4.5	4.0

出所：1971年~74年「O FANTASTICO KIRI」

(2) 市場

桐材の国内消費は現在までのところ皆無に等しい状態で工業化は行なわれていない。大手の家具工場が製品化を図ったことがあるが実現していないし、パラナ州には個人的な規模の製材が行なわれているところもあるが、試験段階的なもので製品の市販普及まではいっていない。現在のところ桐の市場は海外の需要による以外になく、海外輸出の場合も日本1国のみという不安定さである。

対日輸出量は1973年より開始されているが75年に増えており100万ドルを越えている。翌76年には更に増加して160万ドルを超えたが77年には再び100万ドルを割っており、78年はさらに半減している。この輸出量を容量でみると最高時の77年度の輸出量は7,600 m^3 、75年が5,400 m^3 、78年が4,100 m^3 という推移であり、容量、金額両面からみて安定した輸出とはいえないし、又国としては極めて少額の輸出である。

表199 桐の輸出実績 金額 百万ドル

1975	1976	1977	1978
12	1.6	0.9	0.4

出所：CACEX

桐の輸出会社は15社が登録されているが、この中に含まれている三井、丸紅、日商岩井の3社は1976年以降桐の取扱いを行っておらず伊藤忠も76年に少量取扱ただけで中止している。したがって実際に桐の輸出を行っているのは11社のうち8社がサンパウロ州材を対象に残りがパラナ州材の取扱いである。

輸出価格についてはCACEXが統制しており形状に応じた最低価格を定めている。(表200) 輸出実績からみると、CACEXが定める未口直径の丸太は輸出量が少いとみえて、平均価格も200ドル/ m^3 をわずかに上回る単価である。

表200 桐の輸出単価 ドル/ m^3

1973年	1974	1975	1976	1977
1400	207.4	215.6	219.1	214.9

出所：CACEX

表201 CACEXが定める桐の輸出最低価格 25/10/78以降

丸太の末口直径	m ³ 当りFOB.U.S\$
11 ~ 14 cm	15000
15 ~ 19 "	18000
20 ~ 25 "	27000
26 ~ 31 "	31000
32 ~ 37 "	35000
38 ~ 80 "	38000

出所：BANCO DO BRASIL

唯一の輸出国である日本の年間需要は約15万m³と推定されており、その半数が海外よりの輸入に依存しているといわれている。約7万m³以上が輸入されているわけだがブラジルよりの輸出量は8千m³足らずで日本の輸入量の1割程度しかない。これは台湾、中国といった豊富かつ材質に勝る供給国が近距離に存在しているためで、ブラジルは今のところあくまで第2次の供給国の立場である。たとえ日本の輸入量の3分の1、2万5千m³をブラジルが輸出するとしても現在の植付本数4百50万本(10本で1m³を得るとして)の容量約45万m³は18年分の在庫を持っていることとなる。

この様な状況を見ると桐の市場は現時点では可能性が極めて少ないといえる。一方国の方針をみると75年5月5日付農務省森林開発庁布告で一般の植林に対する税務特典の枠から桐は除外されており、かんきつ類と同様の取扱いを受けるようになった。松、ユーカリといった優先的取扱いを受ける植林とは逆に桐の栽培は今のところ見通しの暗い部門である。

表202 日本の桐需要 単位 m³

年 度	国内生産	輸 入	計
1968	200,786	10,935	211,721
1969	166,339	13,235	179,574
1970	97,517	11,372	108,889
1971	98,925	19,640	118,565
1972	71,057	51,765	122,822
1973	60,239	53,789	114,023

出所：全桐連資料

26 花 卉 (サンパウロ近郊)

(1) 生 産

ブラジルの花卉栽培はもともとヨーロッパ系移民のポルトガル系、ドイツ系、イタリア系などによって導入され、草花程度のものが副業的に行なわれていたが第2次大戦を堺とした工業化に伴う都市の発達から生活様式が従来と大きく変化した頃を堺として花への関心が一般市民のなかに高まり、これに呼応した生産の拡大が行なわれてきた。生産者も従来のポルトガル系等に代って日系とオランダ系が抬頭し、優良品種の導入や栽培技術の改良に貢献し生産分野に重要な地位を占めて現在にいたっている。

ブラジルにおける花卉栽培が長らく2次的な農業の地位にあったことから国又は州としての統計は皆無の状態であったが2年程前によくサンパウロ農務局が調査の必要性を認めて予備調査を行った程度で現在にいたるも栽培農家数や栽培面積に関する数字は不明であるがCEAGESP (サンパウロ中央卸市場) や業界誌、専門家の意見を総合してみるとサンパウロ州内での栽培状況は次の通りとなっている。

イ) パ ラ

表203 サン・パウロ州内におけるバラの栽培状況

区 分	1968年	1975年
栽 培 面 積	240 ha	844 ha
生 産 量	200万本	700万本

出所：1968年度農業と協同誌 1972年4月号

1975年度DIRIGENTE RURAL 1978年5/6月号

表204 バラのCEAGESP出荷量と価格の推移

年 度	入 荷 量 1,000ダース	平均価格/1打	対前年比
1974	3,052.1	CR 2.58	35.1%
1975	3,410.2	3.22	24.8
1976	3,278.6	4.98	54.7
1977	3,674.6	6.20	24.5
1978	3,822.0	8.97	44.6

出所：CEAGESP - BOLETIM ANUAL

一般の農産物の大部分が中央市場で取引されるのと異なり花の流通は中央卸市場を経由する方法と農場よりの直接販売の2つに大別され直接販売の方が量が多いといわれている。花の統

計が困難なのはこのためである。

バラの CEAGESP 入荷量をみると 78 年度で 380 万ダースであるが 75 年当時より大巾な増加はみられず限界にきているようである。価格も平均した上昇をみておらず毎月の入荷量に応じて大きな変動があり全般的に供給過剰気味である。栽培は日系が多くを占めている。

ロ) グラジオラス

バラ以外の花については農務局の予備調査も行なわれていないため栽培面積及び生産量を知ることが困難である。とくにグラジオラスの場合は周年栽培で 1 年を通じて出荷出来るように植付けられており、時期により栽培面積も異ってくるので生産量を推定するのも難かしいといわれている。サンパウロ州内の栽培はオランダ系が占めており、オランダ系移住地のオランブラが中心地となっている。

表 205 オランブラにおけるグラジオラスの生産状況

年 度	1960	1965	1970	1978
日産量 ダース	100	1,000	4~5,000	20,000

出所：DIRIGENTE RURAL 1978年5/6月号

表 206 グラジオラスの CEAGESP 入荷量と平均価格

年 度	入 荷 量 1,000ダース	平均価格 CR	前年比上昇率
1974	1,440.4	352	27.1
1975	1,547.7	494	40.3
1976	1,064.0	742	50.2
1977	670.6	990	33.4
1978	1,431.5	1340	35.4

出所：CEAGESP BOLETIM ANUAL

グラジオラスの CEAGESP への入荷量は 76 年、77 年を除いて年間約 150 万ダース前後である。平均価格は 75 年、76 年に上昇したほかは、77 年の入荷減少にもかかわらず対前年比伸び率は悪い。月別に入荷量と価格の関係は 6、7 月が入荷量の大小にかかわらず高くまたクリスマスのある 12 月に上昇する。

ハ) バラ

ポンポン菊及び日本菊は日系農家によって導入されていらい 1971 年までは日系農家の独占であったが、最近では菊の市場性が高まってきたためオランブラを始めとし日系以外の栽培

も盛んとなってきた。サンパウロ州内の栽培地域はボンボン菊の場合コチア、アルジャー、イビウーナ、ジャカレー等が多く日本菊ではアチバイヤ、モジダス、クルーゼス、サンロック等が代表的な産地である。

表207 菊の CEAGESP 入荷量と平均単価

ボンボン菊

年 度	入荷量 1,000 束	平均価格C/束	対前年比率
1974	8292	304	351
1975	1,028.3	464	52.6
1976	9281	689	48.5
1977	1,2950	856	242
1978	891.2	1229	436

日本菊 (1,000ダース)

1974	57.6	1363	116.0
1975	901	1870	37.2
1976	685	2777	48.5
1977	107.3	3688	32.8
1978	21.6	5263	427

出所：CEAGESP BOLETIM ANUAL

ボンボン菊は72年以降入荷量が増加しており77年には従来2位のグラジオラスをしのいでバラに次ぐ状態で需要が急激に伸びている商品の1つである。価格は、バラの様な変動は少なく年間を通じて比較的に平均している。高度の技術を要する日本菊の方も切花での入荷量は少ないが、77年までは順調な伸びを示してきたものの78年には病害の原因もあって急激に減少した。取引価格は全商品の中でもっとも高く平均価格もほぼインフレ率に応じた上昇ぶりである。

ニ) カーネーション

カーネーションは古くよりヨーロッパ移民と共に導入されて以来、ブラジルでの栽培歴の古い花であるが、1955年に花岡女史によるウルグアイよりの大輪シム系カーネーションの導入以来、日系農家の間に改良種が普及され、以後在来種の商品価値が失なわれていくと共に栽培も日系が占めるようになった。

サンパウロ州内での主要生産地はアチバイヤ、コチア、サンベルナルド・ド・カンボ、モジダス・クルーゼス及びビスザノがあげられる。

表 2 0 8 カーネーションのCEAGESP入荷量と平均価格

年 度	入荷量 1,000ダース	平均価格CR	対前年比率
1 9 7 4	5 2 0 2	3 5 4	3 0 0
1 9 7 5	3 8 2 2	5 4 6	5 4 2
1 9 7 6	3 5 2.8	7 4 1	3 5 7
1 9 7 7	3 6 8 8	9 8 6	3 3 1
1 9 7 8	4 4 4 3	1 5 3 1	5 5 3

出所：CEAGESP BOLETIM ANUAL

カーネーションの入荷量は年々減少しており75年～77年は71年当時の半数に満たない状態で78年になってようやく半数に達した程度である。この現象は近年来病害の発生のため生産量が減少したことによるとされている。入荷量の減少から価格は辛ろうじて持ちこたえているが、78年には出荷量がやや復活した割に平均価格は前年比553%と好調であった。

(2) 輸 出

花の生産がすでに飽和状態に近づいてきたといわれ始めた70年代の始めより国内市場に代る海外市場への関心が高まり、日系、オランダ系を中心とした企業の栽培農家による輸出が徐々に進められてきた。

バラを中心とする切花の輸出はバラが77年までヨーロッパ及び北米市場7ヶ国、78年度で10ヶ国に輸出され、またバラ以外の切花は例年9～10ヶ国に向けて行なわれているが、バラ以外の花が78年度に増加した以外は輸出量、金額とも大きな変化はなく横ばいの状態が続いている。

全体的にみて花類の輸出の中で大きな比率を占めているのはドライフラワーで毎年着実に伸びており花全体の輸出を支える形となっている。又観葉植物の輸出がバラの輸出額を越えて伸びていることも注目される。

表 2 0 9 ブラジルよりの花の輸出実績 金額 単位 百万ドル

種 類	1 9 7 5	1 9 7 6	1 9 7 7	1 9 7 8
ドライフラワー(A)	1 7	1 7	2 4	2 9
" (B)	0 7	0 6	0 8	0 8
バ ラ	0 6	0.4	0 2	0 4
そ の 他 の 花	0 1	0 4	0 5	0 7
観 葉 植 物	0 3	0.5	0 9	0 7
計	3.4	3 6	4 8	5 5

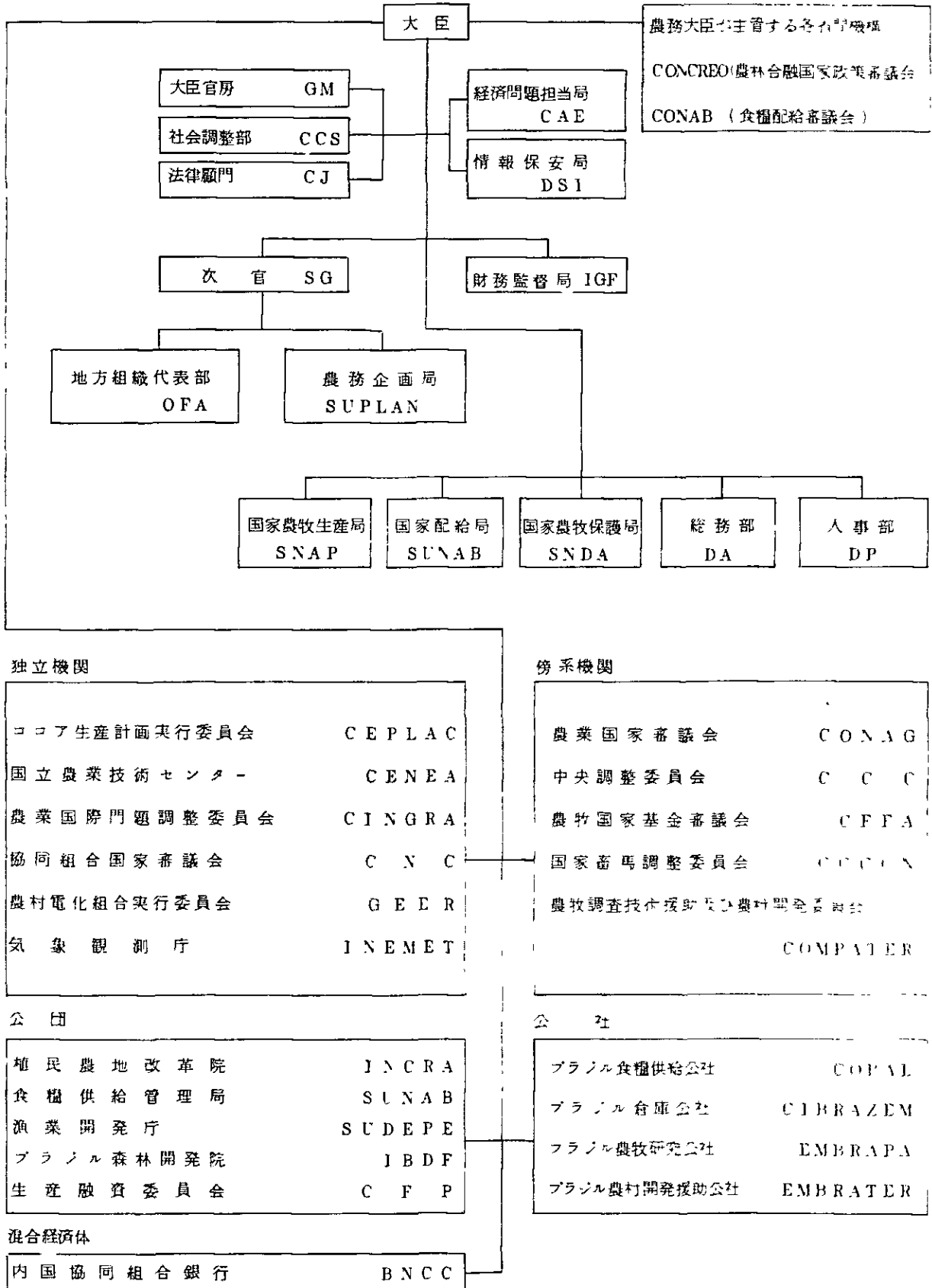
出所：CACEX

注)ドライフラワー(A)はバラ積(B)は飾りつけたもの

全般的にみて花の国内生産は飽和状態にあり、今後国民所得の向上による購買力の増大を期待する以外にないがそれだけに高度の技術が要求されており、個人経営の方式から企業的形式への移行が求められている。とくに輸出においては、発注量に応じ得る出荷体制をもつためには、生産者の協同体の必要性が要求されてきている現状にある。

Ⅲ そ の 他

1 農務省組織



出所：農務省企画局 DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUARIA 74/79

2 1979年度農務省予算

1977年度、1978年度及び1979年度の国庫支出農務省予算の内容は次の通りである。

農務省予算(国庫支出)

単位 CR1,000

項 目	1977年度	1978年度	1979年度
一 般 管 理 費	1,001,562	1,207,050	1,776,513
金 融 費 用 支 出	776,311	1,214,740	1,753,953
政 府 計 画	412,454	439,965	597,863
科 学 技 術 振 興 費	454,255	719,369	1,256,006
農 地 改 革 費	133,429	138,921	207,585
農 業 生 産 費	241,783	291,989	277,442
畜 産 関 係 費	364,909	582,259	837,927
食 糧 配 給 費	285,116	428,636	560,194
天 然 資 源 保 護 費	100,589	178,951	313,863
農 村 振 興 費	429,966	738,720	1,238,201
広 報 宣 伝 費	3,482	5,110	6,993
社 会 統 合 計 画 費	264,500	390,500	512,281
財 務 費	50,000	40,000	33,000
職 員 社 会 福 利 費	22,640	24,990	34,707
合 計	4,541,000	6,401,200	9,396,510

出所： 1977年度予算 法律第6.395 (9/12/1976付)

1978年度予算 法律第6.486 (6/12/1977付)

1979年度予算 法律第6.597 (1/12/1978付)

3. 主要農業プロジェクトの現状

1) POLOAMAZONIA 計画

第2次国家開発計画に定められた北部地方の農業開発プロジェクトでアマゾン川及び建設中のアマゾン横断道路の開発を目指すもので27の連邦機関と32の州機関が参加して実施されている。74年から78年までの予算は78年の金額に換算して76億3千860万クルセイロで、その中70%が75年～77年に投下されている。現在までの実績は道路建設2,037km、支線の農村道路1,512km、飛行場4ヶ所、港湾2ヶ所の建設などがあげられる。

2) PRONORDAR 計画

パラ州東部の31郡を対象とする開発計画で1977年までに4千200万クルセイロの資金が投じられ、その26%が農業面にあてられた。1978年のプログラムには1億2千万クルセイロが投じられたが、そのうち4千30万を農業に、1千600万を輸送面に4千400万を都市開発、400万を教育、800万が電力に充当されている。

3) POLONORDESTE 計画

1974年に開始された東北伯開発計画は技術の改良を通じて東北伯地方の農牧形態を近代化しようとするもので対象地域は60万平方キロ米、500の郡を包含している。協同組合の強化、891kmの道路建設、農村電化などの実績があげられる。

4) PROJETO SERTANEJO

1976年に開始された東北伯地方の半乾燥地帯の中小農民の経済的地位の向上を図ろうとする計画で、東北伯の52%にあたる86万平方キロ米が対象となっている。78年度には公共投資5億クルセイロが投じられ1億3千500万クルセイロの融資が実施された。

5) 東北伯灌漑計画

東北伯地方に灌漑による営農をすすめようとする計画で74年から78年までに30億クルセイロの資金が投下されている。1976年来5万9千ヘクタールの東北伯地方灌漑地帯を拡大しようとするもので対象面積は45万ヘクタールである。78年には1万2千ヘクタールの灌漑が行われた。

6) 東北伯アグロインダストリー計画

東北伯地方の農産物加工を目的としたもので第1期の74～77年の計画が終り8億クルセイロの資金が投下された。この計画により東北伯農民の所得増大が期待されているが、これを補完するため第2期計画として79年12月末までの予算が承認されている。

7) POLOCENTRO 計画

75年から79年にかけてセラード地帯300万ヘクタールを開発しようとするもので対

象地域は南北マツト・グロンソ州、ゴヤス州、ミナス州である。1977年までに2,373のプロジェクトが承認されており、79年までに目標が達成されることが期待されている。78年には日伯合併による開発会社も設立され79年度より本格的な事業にとり組む予定となっている。

8) REGIÃO GEO ECONOMICO DE BRASÍLIA 計画

ブラジリア地区の経済社会基礎構造の建設を目指すもので78年までに7億4千200万クルセイロの資金が投下されている。この計画はリオ・プレット川の灌漑地区1,000ヘクタールを開発するもので100家族が入植し、アグロインダストリー計画も進められ2,000人の雇傭を可能としている。

9) PRODEGRAN 計画

グランデ・ドウラウドス地方の特別計画で農耕地を50万ヘクタールに拡大しようとするプロジェクトである。78年末までに70万ヘクタールを開発する計画目標のうち39%のみが達成したと伝えられている。

10) マツト・グロンソ大沼沢地帯の開発計画

マツト・グロンソ大沼沢地帯17万平方キロを対象とし、地区内の牧畜及び漁業のためのインフラストラクチャーの整備と合わせ、畜産物の加工を通じて雇用機会の増大を図ろうとするものである。78年末までの投下資金は6億2千800万クルセイロであった。

11) 北フルミネンセ特別計画

第2次国家開発計画の優先目標とされているリオ州北部の復興計画で土地の改良、工業及び農業開発が進められている。とくに地区内河川の洪水を防ぐための河川市の拡大工事が行われた。技術開発にはミナス州のピソザ農科大学、カンピーナス食品技術研究所、砂糖アルコール院、国家技術院などが参加している。

12) パラナ北西部の農地浸蝕対策

パラナ州のサンパウロ及びマツト・グロンソ州境には人口密度が高く1930年以降のコーヒー栽培の拡大によってその80%が集約しているが、土地の浸蝕がはげしく表土が流失しているためこれを防止する対策としてすすめられている。

13) ラゴア・ミリン開発計画

ブラジルとウルグアイを含むラゴア盆地6万2千km²の開発は1972年以降進められているが、ブラジル側の工事としては、水分の塩害防止、40万ヘクタールの灌漑、ペロッタス及びリオ・グランテ市への給水、電力補給などが重点的に進められた。

14) 第1南西計画

リオ・グランデ・ド・スール州 IBICUI 川及び QUARAI 川流域約7万2千ヘクタールの水利農業の開発をすすめようとするもので、現在開発の可能性についての調査段階にある。

参 考 資 料

LEVANTAMENTO SISTEMÁTICO DA PRODUÇÃO AGROPECUÁRIA

企画者 ブラジル地理統計院

ANUARIO ESTATÍSTICO

ブラジル地理統計院

PROGNÓSTICO 78/79, PROGNÓSTICO 78/79 RIGIÃO SUL

サンパウロ州農務局 農業経済研究所

DESEMPENHO DO SETOR AGROPECUÁRIA

農務省 農務企画局 (SUPLAN)

CONJUNTURA ECONÓMICA

ゼツリオ・グアルガ経済研究所

GAZETA MERCANTIL

ガゼッタ・メルカンチル紙

CACEX 輸出入統計

伯銀貿易管理局、リオ市及サンパウロ市

RELATORIO DO BANCO CENTRAL DO BRASIL

中 銀 報 告

DIÁRIO OFICIAL DA UNIÃO

官 報

DIRIGENTE RURAL

経済誌 VISÃO 社

ブラジルの農業

COOPERAÇÃO EDITORA 社

JICA